

中平田東地区遺跡群

手蔵田5・6・9遺跡
本川遺跡
発掘調査報告書

1989

山 形 県

山形県教育委員会

中平田東地区遺跡群

てぐらだ
手蔵田5・6・9遺跡
本川遺跡
発掘調査報告書

平成元年3月

山 形 県

山形県教育委員会



手蔵田 5 遺跡 A 区



手蔵田5遺跡A区北半部（西から）



手蔵田5遺跡A区 S B730（南西から）



手蔵田5遺跡A区 SD400 (南から)



手蔵田5遺跡A区 SD540 (南から)



手蔵田5遺跡B区 SD21 (南から)



本川遺跡 EB2柱根 (南から)

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した県営ほ場整備事業中平田東地区にかかる、手蔵田5・6・9遺跡・本川遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡群の位置する飽海平野は、出羽国府と考えられている城輪柵跡をはじめ多数の古代の遺跡が確認されています。とくに手蔵田地区では近年の発掘調査により、多くの遺跡の存在が明かにされています。

手蔵田5遺跡では板材列に囲われた集落の一部や道路跡が検出されました。手蔵田6遺跡では溝跡や、「大家」の墨書ある土器が検出されています。手蔵田9遺跡では近接する手蔵田10・11遺跡と関連する、中世の遺構が検出されています。本川遺跡では太い柱根が検出されています。

埋蔵文化財は我々に埋もれたる過去の生活の有様を彷彿と再現させてくれます。しかし遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないのです。埋蔵文化財という文化遺跡は、私たちの祖先が長い歴史の中で創造し、育んできたものの痕跡といえます。これら祖先の歴史を知るとともに愛護し、子孫へと伝えていくことが現代に生きる私たちの重要な責務といえるでしょう。

近年県内各地で開発事業が増加するのにもなって、埋蔵文化財とのかかわりも増加する一方です。今後とも県民生活の文化向上、地域社会の整備などとの調整を求めながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存です。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねて、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査において御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成元年3月

山形県教育委員会

教育長 木場清耕

例 言

- 1 本書は山形県教育委員会が、山形県農林水産部の委託を受け昭和63年度に実施した、県営ほ場整備事業中平田東地区にかかる、手蔵田5・6・9遺跡本川遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 遺跡の所在地は以下のとおりである。
手蔵田5遺跡 酒田市大字手蔵田字上向
手蔵田6遺跡 酒田市大字手蔵田字杉ノ先
手蔵田9遺跡 酒田市大字手蔵田字船通北
本川遺跡 酒田市大字本川字本川
- 3 各遺跡の調査期間は下記のとおりである。
手蔵田5遺跡 昭和63年5月12日～同年7月29日
手蔵田6遺跡 昭和63年7月5日～同年7月22日
手蔵田9遺跡 昭和63年5月16日～同年5月20日
本川遺跡 昭和63年7月5日～同年7月13日
なお、手蔵田5遺跡の調査説明会を昭和63年7月26日に行った。
- 4 発掘調査の体制は下記のとおりである。
調査主体 山形県教育委員会
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者 主任調査員 佐々木洋治・野尻 侃
現場主任 安部 実
調査員 布施明子
事務局 事務局長 後藤茂弥
事務局長補佐 土門紹穂
事務局員 佐藤大治・長谷部恵子・長谷川浩・高橋春雄
- 5 本書は布施明子・安部 実が担当執筆した。挿図類の作成にあたっては、高山和子、笹沼祐子、渡部清子、小野陽子、伊藤美恵子、鈴木祐子の補助を得た。編集は阿部明彦が、全体を佐々木洋治が総括した。
- 6 出土した遺跡については山形県教育委員会で一括保管している。
- 7 発掘調査にあたっては、最上川右岸土地改良事務所、大町溝土地改良区、酒田市教育委員会、手蔵田部落の協力が得られた。ここに記して感謝申し上げます。

凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

SA……板材列・柱列 SB……建物跡 SD……溝跡・溝状遺構
SF……道路跡 SG……河川跡 SK……土壇 SP……ピット
SX……性格不明遺構 EB……柱跡

2 遺構に付した番号は、各遺跡ごとに1番からとして使用した。

手蔵田5遺跡 1番から800番まで。手蔵田6遺跡 1番から16番まで。

手蔵田9遺跡 1番から4番まで。 本川遺跡 1番から3番まで。

3 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表わし、遺構の埋土等については「F」にアラビア数字を付して区別した。

4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺構実測図の方位記号は真北を示している。

(2) 遺構実測図は原則として1/100の縮尺で採録した。

(3) 土色の記載については、「新版標準土色帳」1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修によった。

(4) 遺物番号は手蔵田5・6・9遺跡・本川遺跡の順に通し番号を使用した。実測図・観察表・図版に共通のものである。

(5) 遺物実測図は1/4の縮尺で採録した。拓影図断面の右側拓本は器表面である。土器実測図・拓影図の断面が黒塗りのものは須恵器である。土器底部中央下に「○」印あるものは底部切り離し技法が「回転糸切り離し」によるものである。

遺物観察表中にある「計測値」欄の()内の数値は、図上復元による推定値である。〈 〉内の数値は残存長である。「出土地点」欄の「F」は遺構内埋土を表わす。

目 次

第1章 遺跡の立地と環境	1	第4章 遺構と遺物	
第2章 調査の経緯		1 手蔵田5遺跡	8
1 調査に至る経過	3	2 手蔵田6遺跡	33
2 調査方法と経過	3	3 手蔵田9遺跡	37
第3章 基本層序	7	4 本川遺跡	40
		第5章 調査のまとめ	42

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第15図 S D540出土土器	25
第2図 手蔵田5・6・9遺跡本川遺跡位置図	5	第16図 S D400出土土器 (1)	26
第3図 手蔵田9遺跡調査区	5	第17図 S D400出土土器 (2)	27
第4図 手蔵田5・6遺跡本川遺跡調査区	5	第18図 墨書土器・ヘラ書き土器	28
第5図 基本層序	7	第19図 他遺構・包含層出土土器	29
第6図 S A500板材列 (北西隅)	12	第20図 墨書・ヘラ書き文字集成図	32
第7図 S D400溝状遺構	13	第21図 出土土器	33
第8図 S D540溝状遺構	14	第22図 手蔵田6遺跡トレンチ別土器集計グラフ	34
第9図 手蔵田5遺跡A区検出遺構	15	第23図 手蔵田6遺跡検出遺構	35
第10図 S D21溝跡	18	第24図 S D2・3溝跡	37
第11図 手蔵田5遺跡B区検出遺構	19	第25図 出土土器	38
第12図 手蔵田5遺跡土器集計グラフ	22	第26図 手蔵田9・10・11遺跡概要図	39
第13図 S D21出土土器	23	第27図 本川遺跡検出遺構	40
第14図 B区トレンチ別土器集計グラフ	24	第28図 E B1・2柱根	41

表

表1 調査工程表	4	表6 手蔵田6遺跡土器観察表	33
表2 建物跡概要	10	表7 手蔵田6遺跡遺構出土土器集計表	34
表3 手蔵田5遺跡土器集計表	22	表8 手蔵田6遺跡トレンチ別土器集計表	34
表4 B区トレンチ別土器集計表	24	表9 手蔵田9遺跡土器観察表	38
表5 手蔵田5遺跡土器観察表	30		

図 版

手蔵田5遺跡A区

- 図版1 遺跡遠景 A区調査風景
- 図版2 A区全景
- 図版3 S F120道路跡
- 図版4 A区近景 S D127溝跡 S A500板材列
- 図版5 S A500板材列
- 図版6 S A500北西コーナー
- 図版7 S A500板材列配置
- 図版8 S A500布掘り土層 S B600建物跡
- 図版9 S B600建物跡
- 図版10 S B650建物跡 S B650・660建物跡
- 図版11 S B660建物跡 S B730建物跡
- 図版12 S B730建物跡 S X192遺構
- 図版13 S D540溝状遺構 S D400溝状遺構
- 図版14 S D400溝状遺構 土層
- 図版15 S D540溝状遺構 土層
- 図版16 S D400遺物出土状況 調査説明会風景

- 図版29 手蔵田5遺跡土器
- 図版30 手蔵田5遺跡土器
- 図版31 手蔵田5遺跡土器
- 図版32 手蔵田5遺跡土器
- 図版33 手蔵田5遺跡土器
- 図版34 手蔵田5遺跡土器
- 図版35 手蔵田5遺跡土器
- 図版36 手蔵田5遺跡土器
- 図版37 手蔵田5遺跡土器
- 図版38 手蔵田5遺跡土器
- 図版39 手蔵田5・6遺跡土器
- 図版40 手蔵田5・9遺跡土器

手蔵田5遺跡B区

- 図版17 B区遠景 T14～21近景
- 図版18 T5板材 S X40遺構
- 図版19 T9・10近景 S X100遺構
- 図版20 S D21溝跡 S D21遺物出土状況
- 図版21 S M708墓壇 S M708出土曲物残片

手蔵田6遺跡

- 図版22 トレンチ掘り状況 S G6河跡
- 図版23 T33・34近景 T25近景

手蔵田9遺跡

- 図版24 調査状況 S D2・3溝跡
- 図版25 S D2・3溝跡 S D2土層

本川遺跡

- 図版26 E B1・2柱根 掘り下げ状況
- 図版27 E B2柱根 底部
- 図版28 手蔵田5遺跡土器

第1章 遺跡の立地と環境

中平田東地区の手蔵田遺跡群は県北西部、庄内平野の北半部中央東、出羽丘陵の山麓よりに位地している。酒田市街から東へ約5km手蔵田部落の南側の水田中にある。標高は約5mを測る。

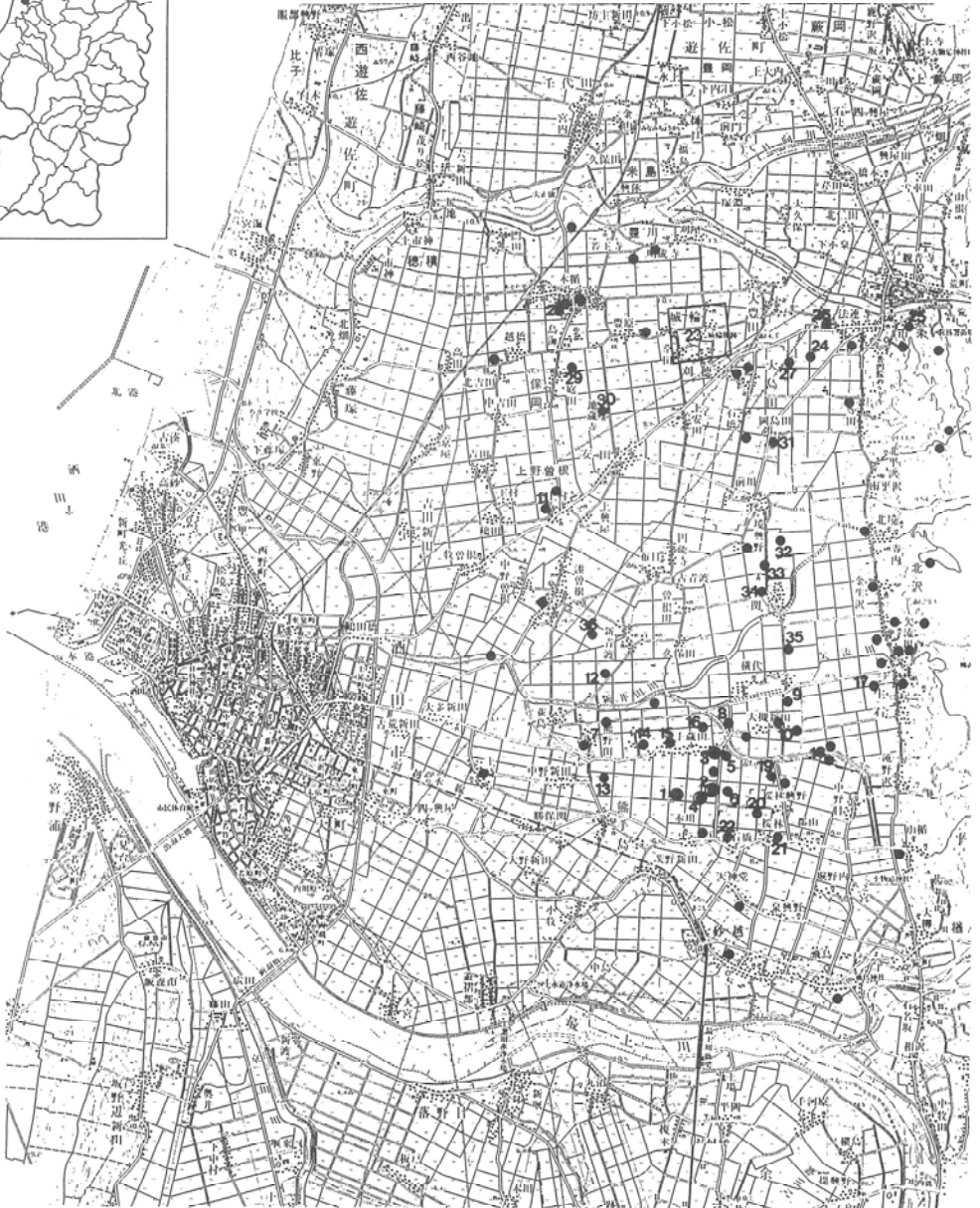
庄内地方の大半を占める庄内平野は出羽丘陵の西に展開する海岸平野である。県内最大の平坦地で、南北約50km、東西6～16km、北部で狭く南部で広がっている。面積は砂丘部を除いて約530km²を測る。平野の西縁には日本海側有数の庄内砂丘があり、北端は吹浦川河口から、南端は湯野浜付近まで約34kmに渡って延びている。砂丘の標高は中央部で約64mを測る。平野の中央には県内を貫流する最上川が広い氾濫源と沖積段丘を形成しながら、諸川と合流して日本海へと注いでいる。北辺には秋田県と県境を分かち鳥海山(2,230m)がそびえている。平野部の大部分は水田で実り豊かな穀倉地帯となっている。

庄内地方には海洋性の気候であり1日の気温の変化が少ない。しかし冬季間は暴風(地吹雪)の日数が多くなる。さらに海上からの北西風が卓越すると、太陽の日照は10日間に2～3日も差さないほど曇天が続く。春から夏にかけては東風が卓越しやすいので、この時期は高温・乾燥及び好天に恵まれる日が多くなる。

遺跡群の立地する飽海南半の地形は東側の出羽丘陵地域と西側の庄内北部河間低地(狭義の河間低地・後背湿地・自然堤防等を含む)に区分されている。現在は開発が進み平坦な地形然としているが、出羽丘陵から流れ出た中小河川により形成された自然堤防により、起伏ある地形であったことが窺い知れる。

庄内地方でこれまでに約300箇所に登る遺跡が確認されている。このうち最上川と日向川によって南北を区切られた飽海平野の南半部では、約60箇所ほどの古代の遺跡が確認されている。これらの遺跡はその密集度からいくつかの地区に分けられる。城輪柵跡を中心として東西に広がる地域、手蔵田・郡山を中心とする地域がある。さらに八幡町一条から生石・山楯に至る「山辺の路」と言われる一帯、大島田から関に至る一帯、庭田から新青渡に至る一帯などの、南北に長く連なる遺跡の分布が見られる。

手蔵田5・6・9遺跡本川遺跡は、手蔵田・郡山を中心とする地域に含まれる。ここには郡山、飛島といった古代からの由来ある地名が残っている所である。手蔵田5遺跡を中心に据えた東西3km南北2kmの範囲で発掘調査が成された遺跡には、北西に南興野遺跡、熊野田遺跡、北に手蔵田2・12遺跡、東に手蔵田6・7・10・11遺跡、大槻新田遺跡、横代遺跡がある。



- | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|--------------|------------|
| 1 手蔵田5遺跡 | 2 手蔵田6遺跡 | 3 手蔵田9遺跡 | 4 木川遺跡 | 5 手蔵田10・11遺跡 | 6 手蔵田6・7遺跡 |
| 7 熊野田遺跡 | 8 手蔵田3遺跡 | 9 横代遺跡 | 10 大槻新田遺跡 | 11 上曾根遺跡 | 12 南興野遺跡 |
| 13 手蔵田4遺跡 | 14 手蔵田1遺跡 | 15 手蔵田2遺跡 | 16 手蔵田12遺跡 | 17 生石2遺跡 | 18 生石4遺跡 |
| 19 桜林興野遺跡 | 20 西田遺跡 | 21 桜林遺跡 | 22 早稲田遺跡 | 23 史跡城輪柵跡 | 24 史跡堂の前遺跡 |
| 25 八森遺跡 | 26 茅針谷地遺跡 | 27 後田遺跡 | 28 新田目城跡 | 29 庭田遺跡 | 30 安田遺跡 |
| 31 俵田遺跡 | 32 境興野遺跡 | 33 北田遺跡 | 34 関B遺跡 | 35 高阿弥田遺跡 | 36 新青渡遺跡 |

第1図 遺跡位置図

第2章 調査の経緯

1 調査に至る経過

昭和63年度に手蔵田部落の南側水田で、県営ほ場整備事業（中平田東地区）が実施される見込みとなった。県教育委員会では、事業が実施される前年の62年10月に、事業区内の遺跡詳細分布調査（試掘調査）を行った。調査では約600箇所の試掘地点を設けた。県遺跡地図による周知の遺跡としては、手蔵田5・6・8・9遺跡、本川遺跡の5遺跡が登録されている。遺構遺物の検出状況から、手蔵田5・8遺跡は一連の遺跡として捉えられ、手蔵田5遺跡として一括した。手蔵田6遺跡は62年度に酒田市教育委員会により緊急発掘調査が行われた、手蔵田6・7遺跡の西側部分にあたる。手蔵田9遺跡は62年度に県教育委員会が緊急発掘調査を行った手蔵田10・11遺跡の西側近郊にあり、その関連性が窺われるものである。本川遺跡は62年度に本川部落の西側地点を県教育委員会が緊急発掘調査を実施しており、今回の調査はそれより北の別地点である。試掘調査の結果、遺構遺物の検出状況はおおむね遺跡地図記載の地点と適合していた。

この調査結果を元に関係期間と協議を重ねた結果、県教育委員会が主体となり、昭和63年度に手蔵田5・6・9遺跡本川遺跡の緊急発掘調査を実施する運びとなった。

2 調査方法と経過

手蔵田5遺跡 A区とB区の二つの調査区を設けた。

A区はほ場整備で床土が削り取られる地域について調査した。5m×5mを1単位とするグリッドを設定した。グリッド設定と呼称においては第3象限の座標軸によった。グリッドのY軸線はN-5°-E方向である。調査区の範囲は東西52.5m南北60mで3,150㎡ある。さらに、北側に東西10m南北5mの50㎡、南側に東西10m南北10mの100㎡を拡張した。調査面積は合計で3,350㎡である。表土はバックホーで除去した。

B区は深く掘削される排水路部分についての調査である。幅3m長さ10mを1単位とするトレンチを排水路センターに合わせて、T1～T21とした21区画を通して設定した。東西距離は220mあり、調査面積は630㎡である。表土はバックホーで除去した。なお、T13とT14の間に農道があったため、この東西10mの部分については未調査である。

手蔵田6遺跡 深く掘削される排水路部分についての調査を行った。幅3m長さ10mを1単位とするトレンチを排水路センターに合わせて、T22～T34とした13区画を通して設定した。東西距離は130mあり、調査面積は390㎡である。表土はバックホーで除去した。

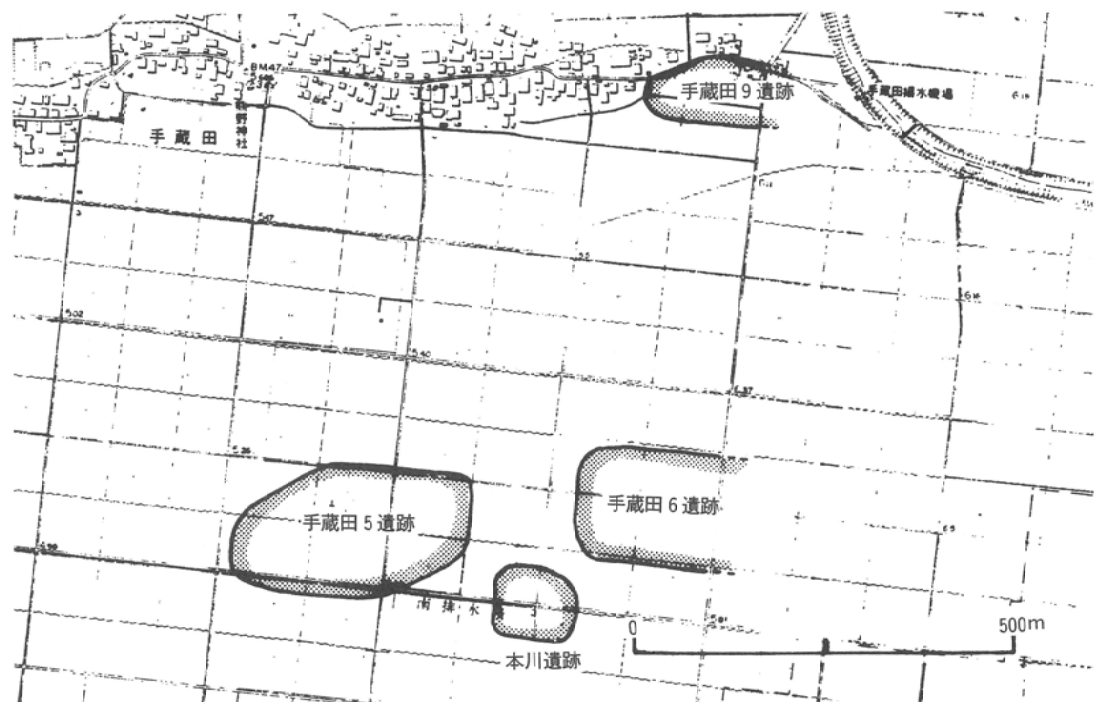
手蔵田9遺跡 深く掘削される排水路部分についての調査を行った。幅3m長さ5mを1単位とするトレンチを排水路センターに合わせて1区画ごとに間隔を開けて設定した。T1～T17とした17区画を人力により掘り下げた。調査面積は260㎡である。

本川遺跡 昭和初期の基盤整備の際に柱根が発見されていた。分布調査で確認した時点では水路中に上面が露頭していた。この柱根を中心に東西25m南北20mの「L」字形をした調査区を設けた。調査面積は395㎡である。表土はバックホーで除去した。

なお、各遺跡の調査工程は表1のとおりである。

月 日		5/2	5/16	5/30	6/13	6/27	7/11	7/25
工 程								
器材搬入・撤収								
環境整備			■					■
手蔵田9遺跡	地区割り							
	遺構検出							
	遺構掘下							
	空中撮影録		■					
手蔵田5遺跡・A区	地区割り							
	表土除去		■					
	遺構検出			■	■	■	■	■
	遺構掘下				■	■	■	■
手蔵田5遺跡・B区	地区割り							
	表土除去		■					
	遺構検出		■	■	■	■	■	■
	遺構掘下		■	■	■	■	■	■
手蔵田6遺跡	地区割り							
	表土除去							
	遺構検出							
	遺構掘下							
本川遺跡	地区割り							
	表土除去							
	遺構検出							
	遺構掘下							
現地説明会								

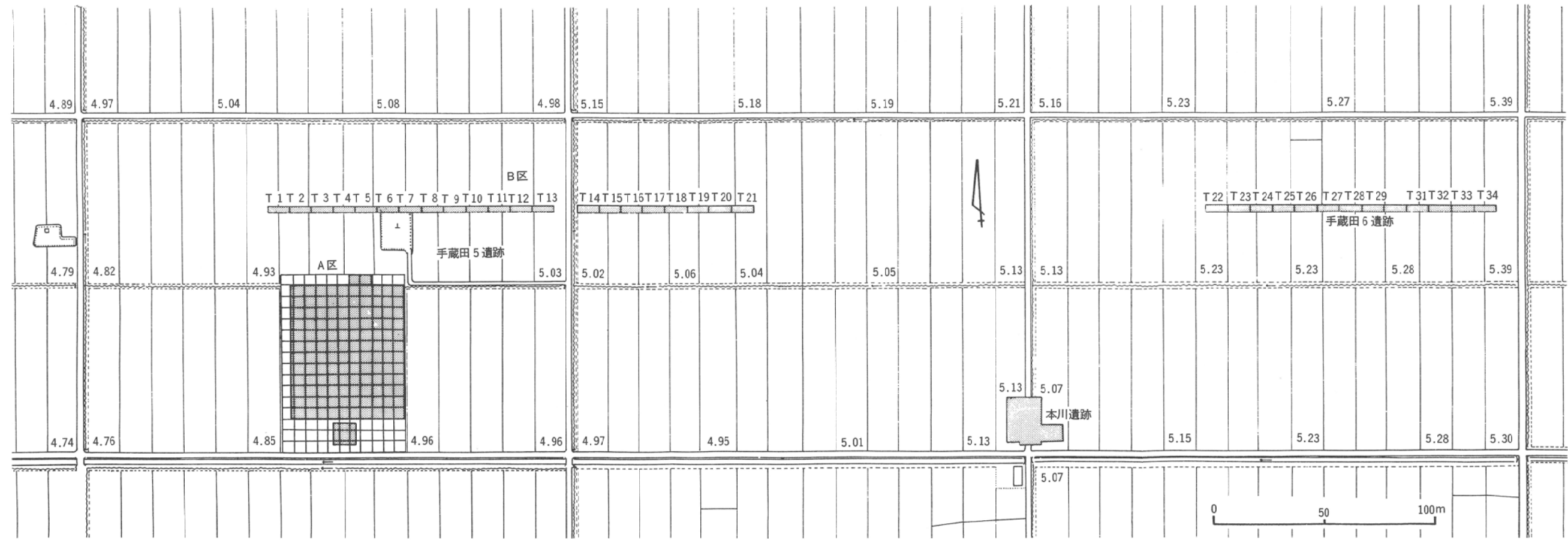
表1 調査工程表



第2図 手蔵田5・6・9遺跡、本川遺跡位置図 (S = 1 : 10,000)



第3図 手蔵田9遺跡調査区 (S = 1 : 2,000)



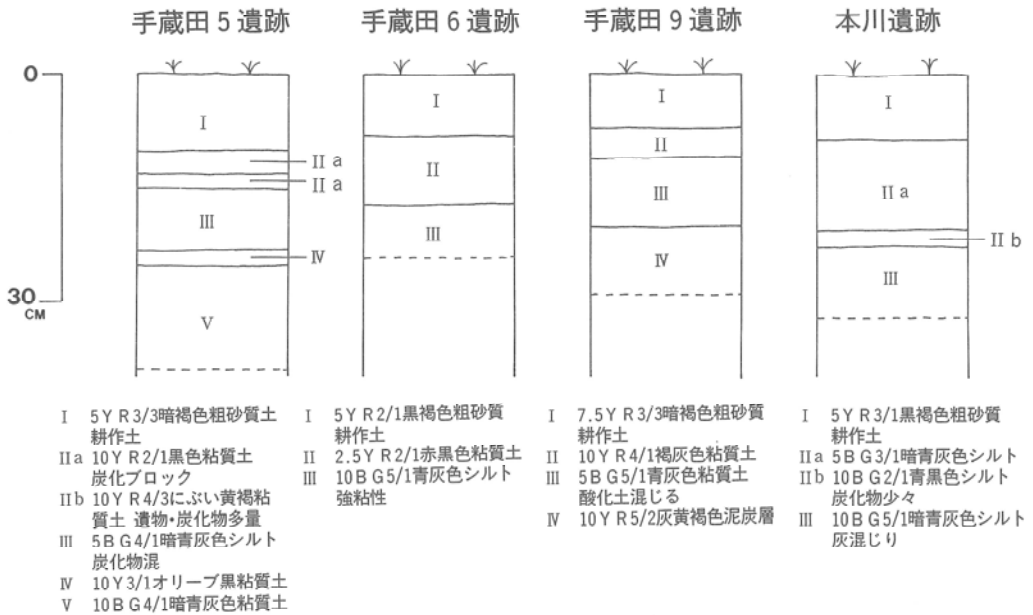
第4図 手蔵田5・6遺跡、本川遺跡調査区 (S = 1 : 2,000)

第3章 基本層序

遺跡群の立地した地区は河間低地である。自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地で構成されたやや起伏のある地形であった事が知られている。手蔵田部落は平田川河道沿いの自然堤防上にある。部落の南側にある遺跡群は狭義の河間低地内微高地上に位置している。遺跡群を覆う表層は第4紀の鳥海火山噴出物・河岸段丘上の堆積物等で出来たシルト・粘土を基本としている。地下水位は一般的に高く、土壌はかなりグライ化が進んでいるようである。

層序は比較的単純なもので、基本的にはI層～III層に分けられる。I層は水田耕作土の腐食土で、平均して10cm程度の厚みでほぼ均一に覆っている。II層は鉄分を含んでおり硬い。特にII b層は遺物包含層で、手蔵田5遺跡A区の北側部分から北方のB区にかけて厚く広がる傾向を見せる。遺構検出面はII層下部からIII層直上面である。表土から遺構検出面までの深さは平均30cm程であった。遺構はIII層上面を掘りこんでいる。

なお、手蔵田9遺跡は、土層の状態からいっても東に隣接した手蔵田10・11遺跡と同一地区に含まれるとするのが妥当と考えられる。



第5図 基本層序

第4章 遺構と遺物

1 手蔵田5遺跡

(1) A区の遺構について

A区で検出された主要な遺構には、掘立柱建物跡10棟、柱列5列、集落の北西側を区画する板材列1列、土器類が投棄されている溝状遺構2条、調査区を南北に縦断する道路状遺構1本である。その他数多くの柱穴・土壌・小溝状遺構があり、登録された遺構数は601を数えている。

遺構が検出されたのは表土から約30cm下のⅢ層直上面である。遺構の遺存状態は暗渠が掘られている部分を除いて良好であった。検出面の標高はA区南西部分で4.5m、板材列の東側で4.6m、北側拡張区北端で4.7mと、北東の方向へ向かってわずかに高くなっていることが認められた。遺構の分布状況は板材列に囲われた中に集中しているといえる。各遺構の主軸方向は道路状遺構・板材列南西辺と同じ向きの、北西方向に傾くものが多数を占めている。

建物跡

建物跡は10棟すべて掘立柱建物跡である。柱穴や柱根は他にも数多く検出されたが、建物跡を構成するには至らなかった。いずれの建物跡も板材列の内側であるA区中央部から北東寄りに位置している。以下では棟方向等から関連すると思われる建物跡をまとめて扱った。

なお、各建物跡の規模や構成などの計測値等については、表2の「建物跡概要」を参照されたい。

S B 600建物跡 棟方向がN-15°-Wを向くものである。6-8-4-6Gに位置し2間×3間の規模である。掘り方の規模が50-80cmと大きく掘り込みも深く。柱穴の遺存状態は良好であった。柱根は検出されていない。

S B 650・660・770建物跡 棟方向がN-20°-22°-Wを向くものである。S B 660は5-7-9-10Gに位置し2間×3間の規模である。S B 660はS B 650と約3mはなれて南東側に並列している。柱穴の残り具合は比較的良い。S B 650はS B 7・8-8・9Gに位置し、2間×2間の総柱の建物で倉庫跡と考えられる。柱根が7箇所検出されている。S B 770は4-6-3・4Gに位置し、2間×2間の規模である。柱穴は柱の間隔がやや不規則である。桁行方向の柱の位置が線上に乗らない部分もある。

S B 730建物跡 棟方向がN-30°-Wを向くものである。4-6-7-9Gに位置し3間×3間の方形である。棟方向が板材列の南側の向きと同じである。北東角にあるE B 734柱穴

はS D540溝状遺構の北東部分と重複している。さらに同様にS F120道路状遺構とも重複している。新旧関係は(旧)S D540→S F120→S B730(新)の順と考えられる。

S B750・760・780・790建物跡 棟方向がN-35°-Wを向くものである。これらの建物跡は調査区の北東部にある。S B750は1-3-1・2 Gに位置し、2間×2間の方形で中央に柱が検出されていない。S B760は1・2-1-3Gに位置し2間×3間で鈎形をしている。南西側に1間分張り出している。東側の一部は調査区の外であった。このS B750とS B760は南北に約60cm離れて並列している。S B780は3・4-4・5 Gに位置し、2間×3間の規模である。北西部には1間×1間の張出部を持つ。柱根が1カ所で検出されている。S B790はその南側に約60cm離れてある。2間×3間の規模で南側に縁束状の張り出しを持つ。このS B780とS B790は、上記S B750・S B760建物跡の南西約9mに南北に並んで検出されている。

S B800建物跡 棟方向がN-53°-Wを向くものである。4・5-5・6 Gで検出された1間×3間の細長い建物跡である。北西角のE B761柱穴はS F120道路状遺構に伴うS D121溝跡と重複している。

板 材 列

S A500板材列はA区中央から西寄りに位置する。「く」字状を呈する。南側で39.80m、北側で46.68m検出された。検出された総長は86.48mを測る。板材列の角の部分は10-7 Gにあり、約113°の角度で屈曲する。南側の板材列はN-28°-W方向へほぼ直線を描いて伸びている。北側はN-37°-Eの方向で北西方向へ湾曲して伸びている。グライ化土壤のため、III層上面では板材列の布掘りがはっきりと確認できなかった。遺構掘下げ時、10-7G内の遺構確認面から25cm程度で縦板が連なって検出され、板材列の存在が確認された。板材の遺存状態は良くない。幅約30cm程の布掘りの中央に縦板が一行に並ぶ。その間に直角に割り込む様に配置された横板の間隔は、計測されたもので1.5m・1.8m・2.1mを測る。板材の長さは20cm程度である。幅は7~15cm、厚さ約3cm内外であった。根元は直線上に切られている。いずれも杉材を使用した割り板と考えられる。

重複関係にあるのはS D127・128溝跡、S F120道路状遺構(S D121・122溝跡含む)とS D112溝状遺構である。S D127・128はS A500板材列と交差しながらまとわりつくようにめぐっている。時期的にはS A500の方が古い。S F120とS A500とではS A500の方が古いと考えられる。

柱 列

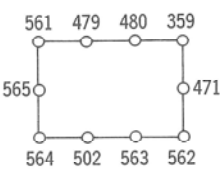
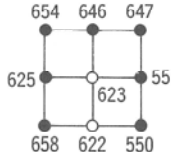
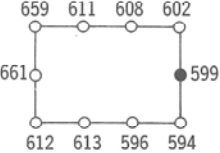
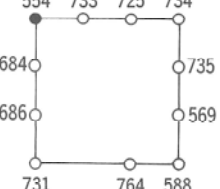
柱列は全部で5列確認された。S B660梁行と同主軸を持つ柱列が2本S B600の東側約2mと2.50mの所で検出された。建物跡の一部が目隠し堀的要素を持つものと見られる。

これに同様のものはS B 650建物跡の北側約30cmにも1本あるが、これは倉庫跡であるため性格は不明である。また4・5-7・8 G内S F 120道路状遺構の路面西肩には道路跡と平行して柱穴が2.5m間隔で並んでいる。

溝状遺構

S D 400溝状遺構 S D 400は3-5~7G III層内にある。平面形は細い長楕円で、規模南北の長軸約7.40m×幅0.70m・約深さ37cmを測る。主軸方位はN-20°-Wである。遺構の遺存状態は良い。これと重複した小溝状遺構はN-35°-Wの主軸方向で共通していた。この溝状遺構は重複する遺構全部に掘り込まれており最も古い。埋土は3層である。F 2層中からは廃棄したらしい赤焼土器の埴、須恵器の墨書きの坏など数十点が出土した。

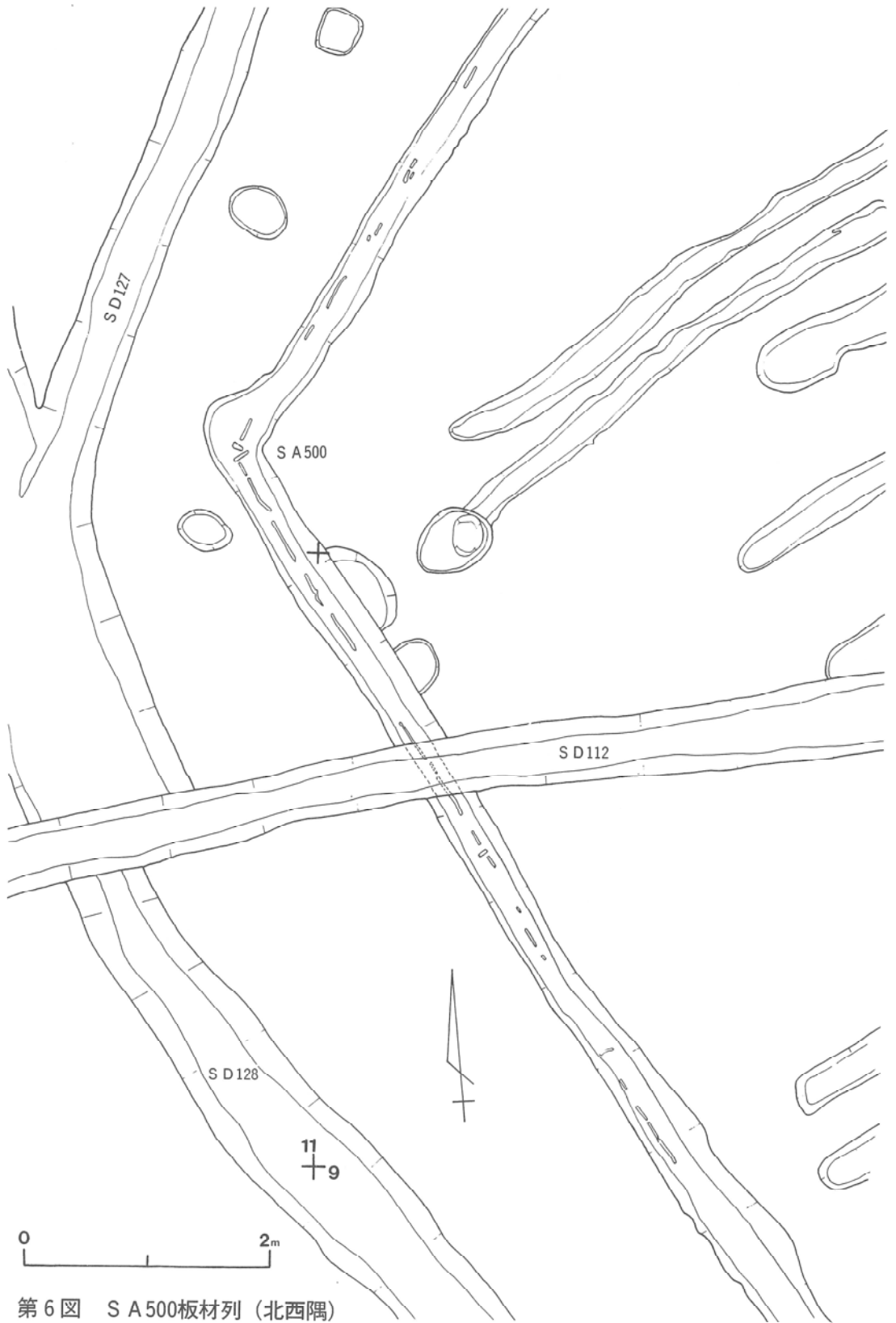
表2 建物跡概要

番号	構成図	方向	規模	柱間寸法	掘り方	備考
S B 600		N-15°-W	梁行 6~6.1m 桁行 8.8m	梁行 E B 359・471間 3.2m E B 471・562間 2.8m 他 3m 桁行 E B 479・480間 2.9m E B 502・563間 2.9m 他 3m	径50~80cm 隅丸方形 不整楕円形	西側がS F 120に重複
S B 650		N-20°-W	南北 4.2~4.3m 東西 4.1m	南北 2.1m 東西 E B 646・647間 2.2m E B 622・550間 2.1m 他 2m	径32~65cm 不整楕円形	倉庫跡
S B 660		N-20°-W	梁行 5.2m 桁行 6.1m	梁行 2.6m 桁行 E B 611・608間 2.1m E B 596・594間 2.2m 他 2m	径38~70cm 隅丸方形 不整楕円形	E B 594は、暗梁に一部切られている
S B 730		N-30°-W	南北 6.2~6.7m 東西 6m	南北 E B 734・735間 1.8m 他 2.2m 東西 E B 554・733間 2.1m E B 733・725間 2.1m E B 725・734間 1.9m E B 764・588間 2.4m	径45~73cm 不整楕円形	S D 540・S F 120と重複 (旧) S D 540→ S F 120→ S B 730(新)

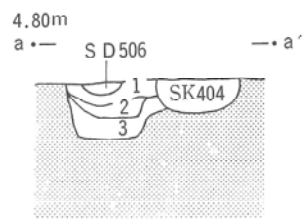
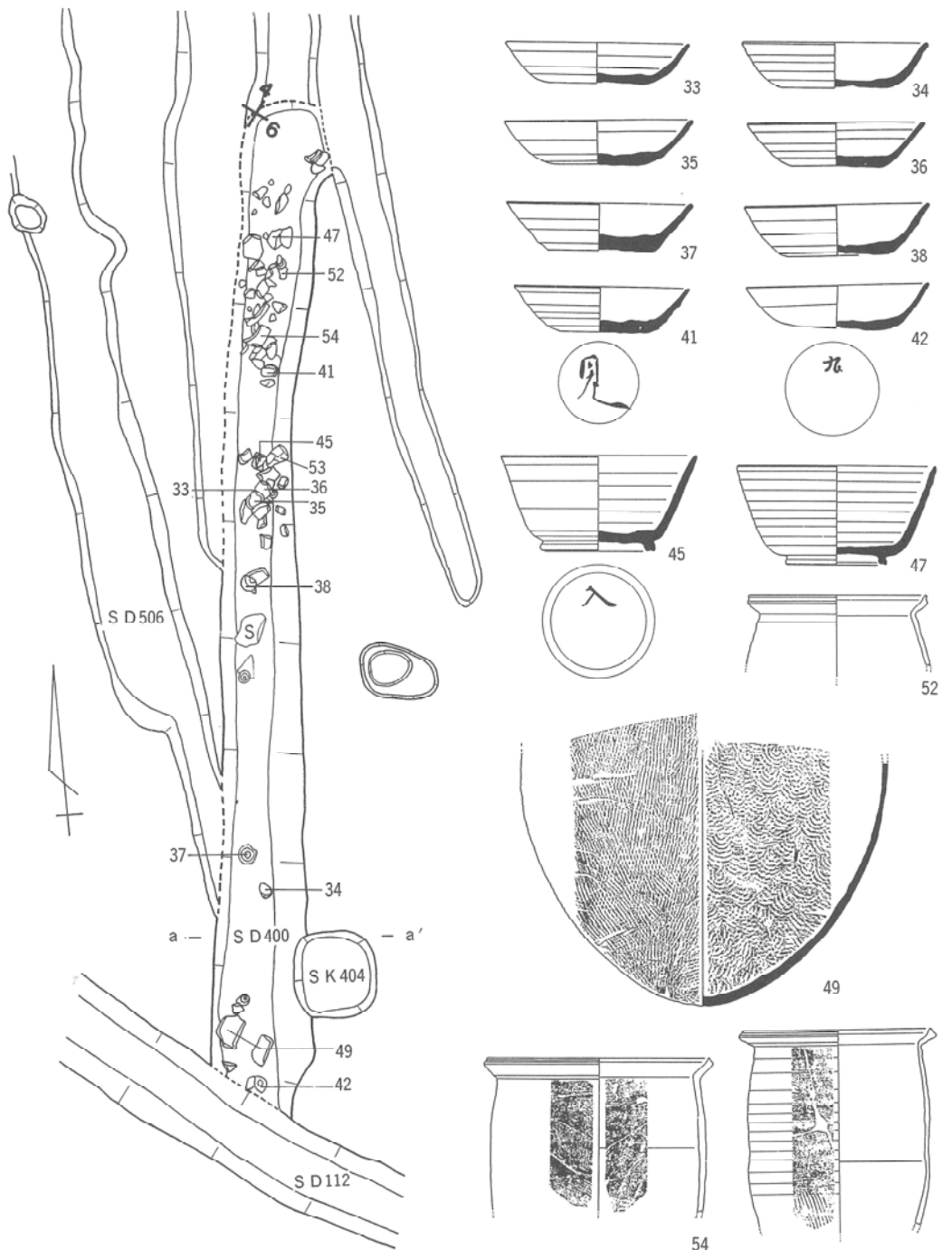
番号	構成図	方向	規模	柱間寸法	掘り方	備考
S B 750		N-35°-W	梁行 4.5m 桁行 5m	梁行 2.2~2.3m 桁行 E B 737・163間 2.7m E B 163・736間 2.3m 他 2.5m	径40~65cm 隅丸方形 不整楕円形	北東角は、調査区外未検出
S B 760		N-35°-W	南北 6m 東西 5m (張出部) 7.5m	南北 E B 739・166間 1.3m E B 738・152間 1.3m 他 2.4m 東西 E B 739・154間 2.7m 他 2.3m	径45~60cm 不整円形	南東角部分調査区外未検出
S B 770		N-22°-W	梁行 4.8m 桁行 7m	梁行 E B 744・743間 2.7m 他 2.3m 桁行 E B 393・341間 2m E B 341・345間 2m E B 748・388間 1.5m 他 2.5m	径22~90cm 不整円形	
S B 780		N-35°-W	梁行 3.4m 桁行 5.8m (張出部) 7.5m	梁行 2.7~2.8m 桁行 E B 754・391間 1.2m E B 749・755間 1.2m E B 751・333間 1.2m E B 294・672間 1.5m E B 391・294間 3m 他 2~2.2m	径30~60cm 不整楕円形 隅丸方形	
S B 790		N-35°-W	梁行 4.7m (4.2m) 桁行 6.5m	梁行 E B 757・756間 3.1m E B 438・757間 1.6m 他 不明 桁行 1.7m (南側張出部, 1.2m)	径35~85cm 不整円形	南西角は土壌により不明
S B 800		N-53°-W	梁行 2.2m 桁行 6.7m	梁行 2.2m 桁行 E B 759・458間 1m E B 761・683間 2.8m その他 2m	径50~70cm 不整円形	S D 121(S F 120)と重複

(注) 構成図内 ●…柱根の残る柱穴

○…掘り方のみ検出された柱穴

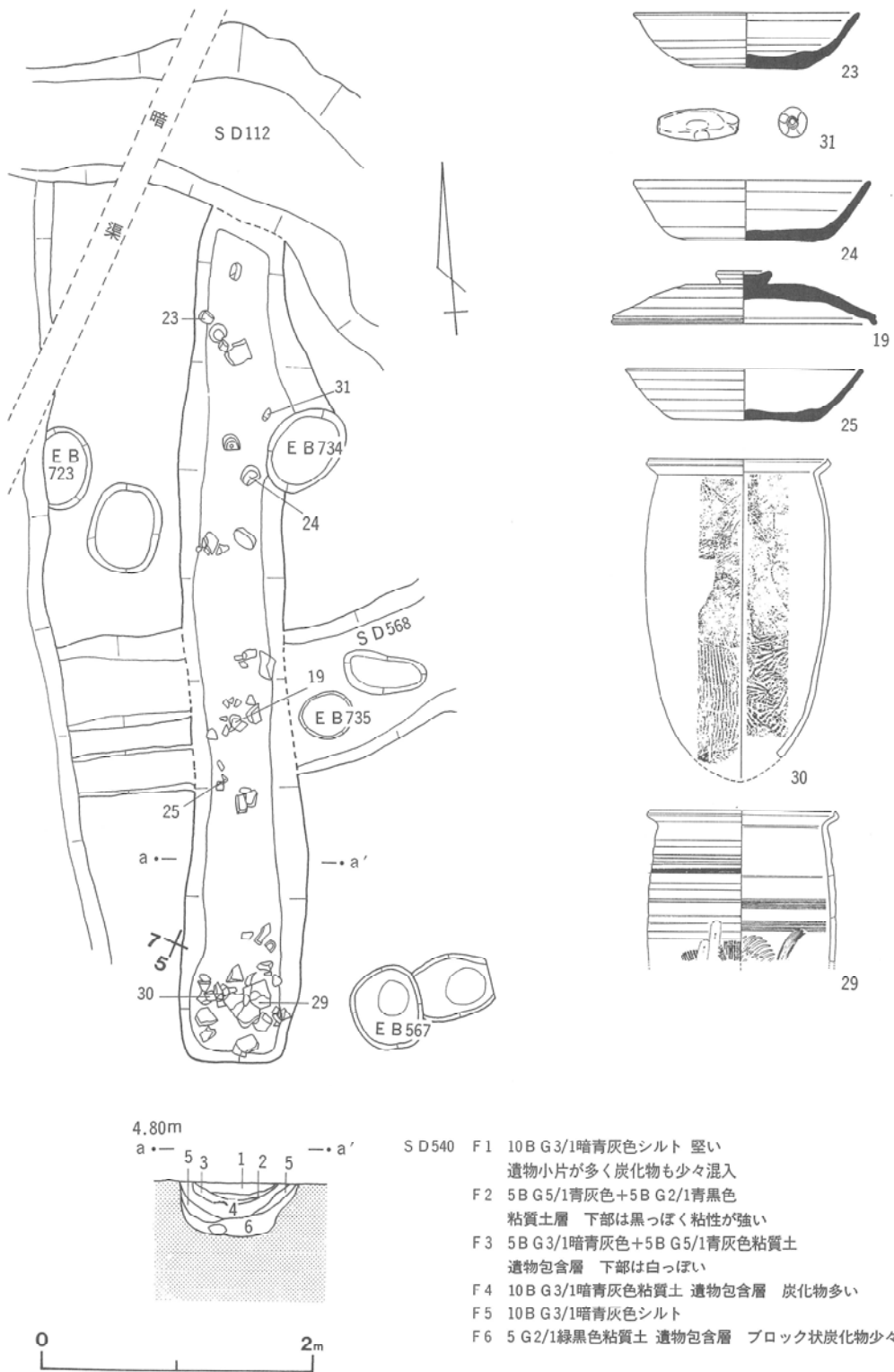


第 6 図 S A 500 板材列 (北西隅)

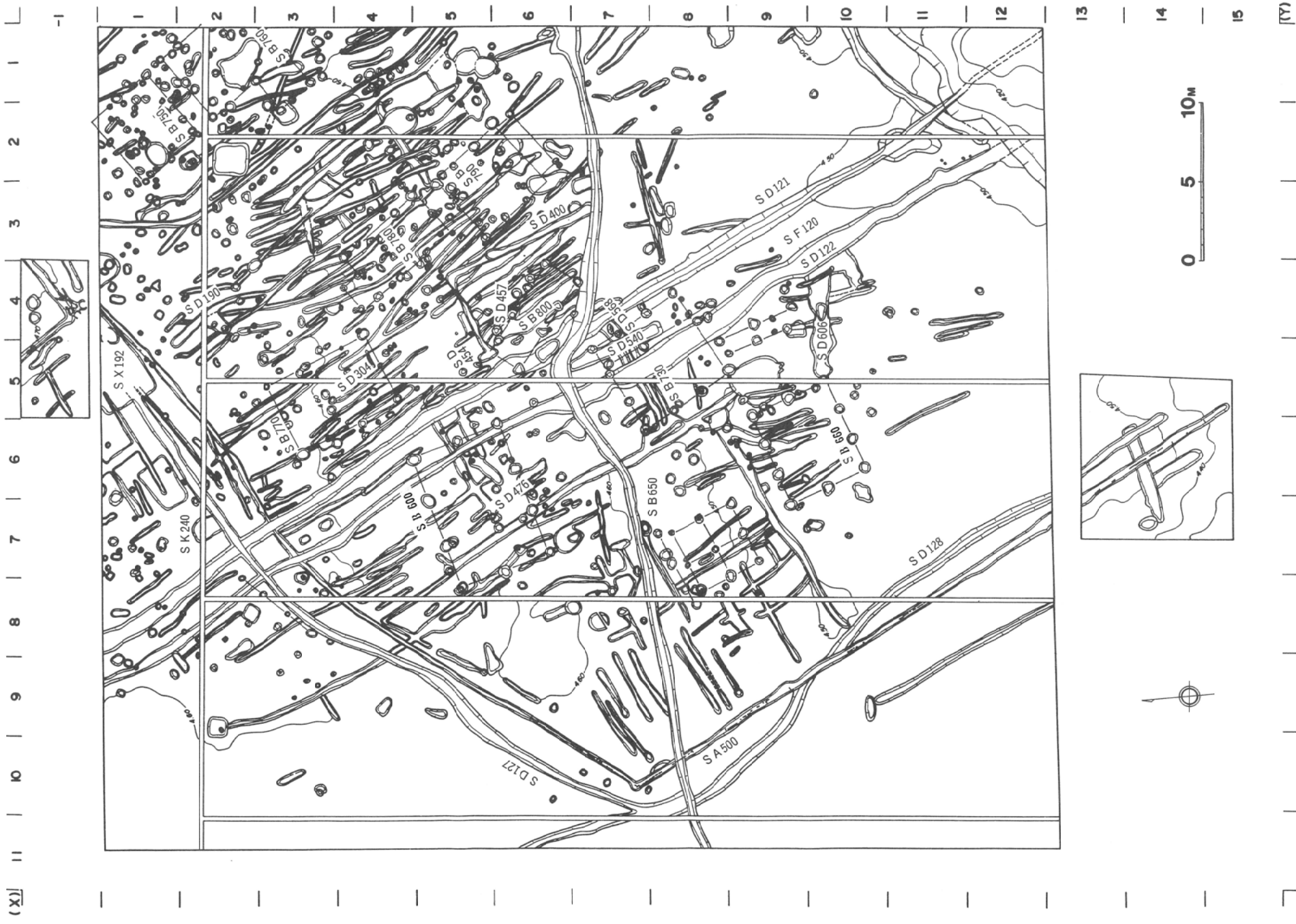


- S K 404 5G4/1暗緑色シルト 炭化物がブロック状に入る
- S D 506 5B G5/1青灰色シルト 炭化物多い(攪乱層)
- S D 400 F 1 5G5/1・10G5/1緑灰色シルト(攪乱層)
- F 2 10G2/1緑黒色粘質土 炭化物層
- F 3 10B G3/1暗青灰色+5B G5/1青灰色(攪乱層)

第7図 SD400溝状遺構



第 8 図 SD540溝状遺構



S D540溝状遺構 S D540は4・5-7・8GのⅢ層内に検出された。遺構の平面形は細長い不整楕円形をしている。規模は南北の長軸6.15m・幅82cm・深さ38cmである。主軸方位はN-23°-Wであった。この溝状遺構はちょうどS F120道路跡の路面上に重複している。S B730の北東隅の柱穴であるE B734は、溝の東側壁の北寄りに重複している。S D568はS D540と直交する。これらの新旧関係は(旧)S D568→S D540→S F120→S B730(新)である。埋土は6層に別れる。F4層～F6層内にて、一括処分したと考えられる赤焼土器の埴・甕、須恵器の坏、土錘等がまとまって出土した。また焼礫が検出されている。

溝状遺構群 これらは板材列に区画された内側北半で特に顕著に見られる性格不明の溝状遺構群である。この地区では溝状遺構と柱穴・ピット多数が複雑に入り乱れて分布している。さらにS A500・S F120・S D112に囲まれた5角形の区域(1-7-1-6G)に最も集中している。各溝状遺構の規模は、長さは約0.6～6m程度と様々であるが、幅は約35～45cmのものがほとんどを占めた。

小溝状遺構は主軸方位の向きによって以下の3種に大別できる。溝状遺構の方位の設定は厳密にはいかないが、個々の遺構として見るだけでなく大きなグループとして考えればその性格や時期等についても解明しやすいのではないかと考える。

N-15°-Wの溝跡 溝状遺構数は20本と少数である。2-4-2-4Gに集中する。検出されたのはⅢ層中位である。検出面の直上には主軸方位N-35°-Wの小溝状遺構が多数重複している上に、埋土が薄茶褐色のためプラン検出が困難であった。

N-62°-E(N-28°-Wと直交する)溝跡 板材列南半部分の東側で、N-28°-Wの板材列と直交する角度をもつ東西に長い溝状遺構が合計14本検出された。また板材列の約9m東にはN-28°-Wの溝跡が平行してある。

N-35°-Wの溝跡 上述の5角形の地区内に顕著に認められる溝状遺構群である。この方位は全部で45本検出されている。掘立柱建物跡が4棟これらに重複しているが、建物の下に当たる部位には溝跡は少ないという傾向を示す。埋土は茶褐色シルトである。

道路状遺構

S F120道路状遺構はA区を斜めに縦断する。両側には側溝状のS D121(東側)S D122(西側)を伴う。この2条に挟まれた堅い面がS F120道路跡の路面と考える。検出された全長は65.9m、幅は1.47m～2.65mを測る。S D121とS D122の規模は、幅0.5～1.8m、深さ約10～30cmである。これらの遺構はN-28°-Wの方向にほぼ一直線でのびている。調査区南東端がS K630に切られている外S B600・S B730・S B800・S A500・S D540・S D112等が重複する。このうちS F120より古いと考えられるのはS A500とS D540である。

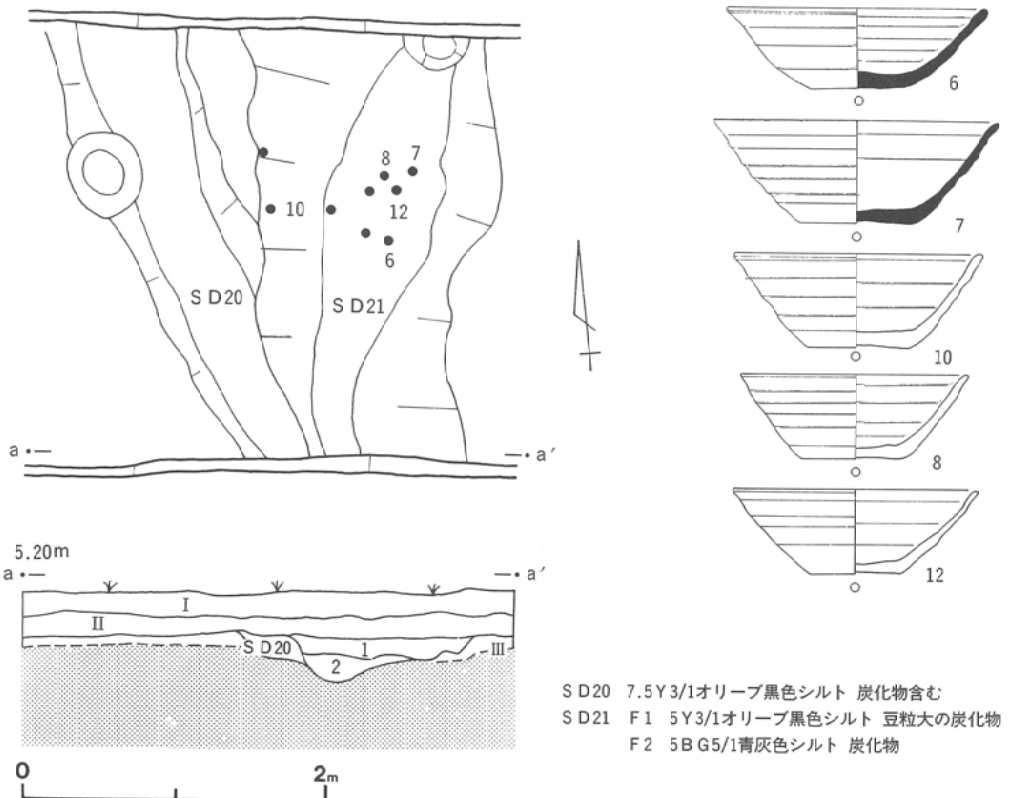
(2) B区の遺構について

検出遺構には、柱穴・溝状遺構・墓墳・性格不明遺構・板材・ピット等がある。遺構登録は109を数える。遺構が密集しているのは、T 9～11にかけてとT 20・T 21である。T 9～11はA区での遺構集中区域の延長上にあたる。このため板材列の続き部分の検出を試してみたが確認されなかった。また、T 7では近代における馬の墓が発見された。

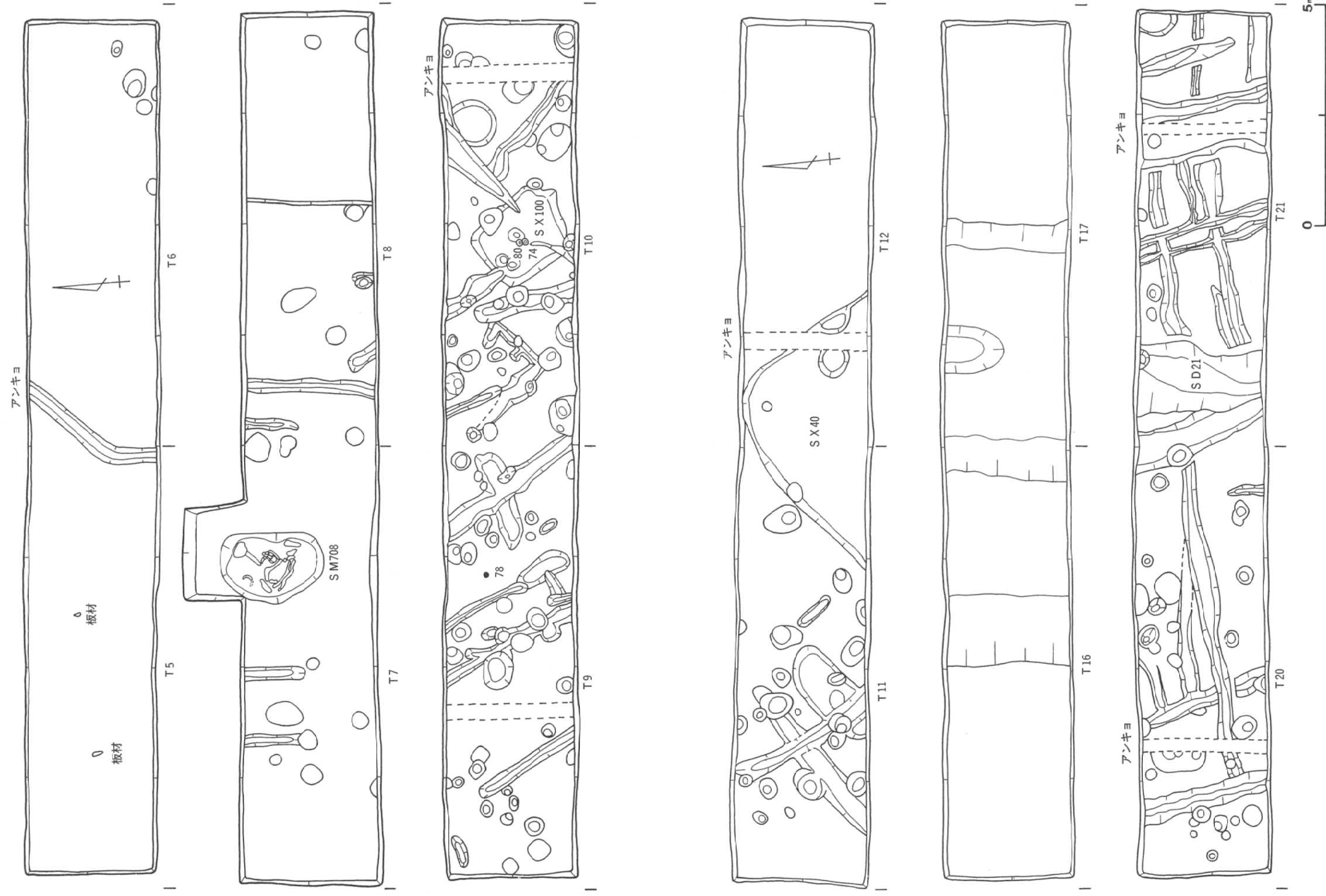
性格不明遺構 T 10でS X 100、T 11・12でS X 40が検出された。これらは堅穴住居跡の可能性も考えたが、柱穴・竈等が検出されず遺存状態も良くないため詳細は不明である。出土したのはS X 100では須恵器回転ヘラ切りの坏、S X 40からは石製紡錘車などがある。

柱 列 柱列はT 8とT 20に1列ずつある。柱列の主軸方位はともにN-87°-W、柱間はT 8で約2.5m、T 20で2mである。建物跡の柱と考えられるが詳細は未詳である。

溝状遺構 T 21の西側にS D 21溝状遺構がある。検出長2.75m、幅1.6m、深さ30cm、主軸はN-13°-Eを測る。西堅南でS D 21を掘り込む。埋土は2層に別れ、下層より須恵器・赤焼土器の回転糸切りの坏が十数個出土した。



第10図 S D 21溝跡



第11図 手蔵田5遺跡B区検出遺構

(3) 出土遺物

遺物は土器がほとんどで整理箱にして83箱出している。A区とB区を合わせた土器破片点数は34,241点を数えた。種別は須恵器、赤焼土器、土師器の3種がある。

各種別の出土点数から見た割合は、須恵器、赤焼土器、土師器の順で、A区包含層では42%、56.5%、1.5%、B区包含層で32.2%、63.9%、3.9%となる。A・B区とも同様な比率を示している。赤焼土器がその半数以上を占め、3～4割を須恵器が占めている。土師器は1割弱である。遺構内出土の土器を見た場合、須恵器が3割弱を占めている。包含層出土の土器類に比べ遺構出土の赤焼土器の出土率が多くなっている。

B区トレンチ土器出土状況を見た場合、T7～12・T18～21に出土数量の増加が見られる。これは遺構の検出状況と合致するものである。手蔵田5遺跡の広がりが見取されるところである。

A・B区とも遺物がまとまった形で検出された遺構は少ない。そのなかでもA区のSD400とSD540溝状遺構から一括して土器が出土している。器種構成は、須恵器では蓋・坏・高台坏・壺・甕があり、赤焼土器には甕・埴がある。赤焼土器の坏類の出土は皆無である。器種の構成に見られているように、赤焼土器が甕・埴に限られることや、須恵器坏類の口径が広く身が浅い形態を示すことなど古い要素が認められる。

また、B区のSD21溝跡からもまとまって土器が出土している。土師器（高台坏・坏）、須恵器（蓋・坏）、赤焼土器（坏・甕・埴）がある。土師器は内面が炭素吸着による処理がされた黒色土器である。須恵器と赤焼土器の坏はすべて回転糸切り無調整のものである。やや深身の形態である。体部はわずかに緩やかに膨らんでいる。口唇部が外側に屈曲するものもある。法量も顕著なばらつきはなく非常に似通ったものである。

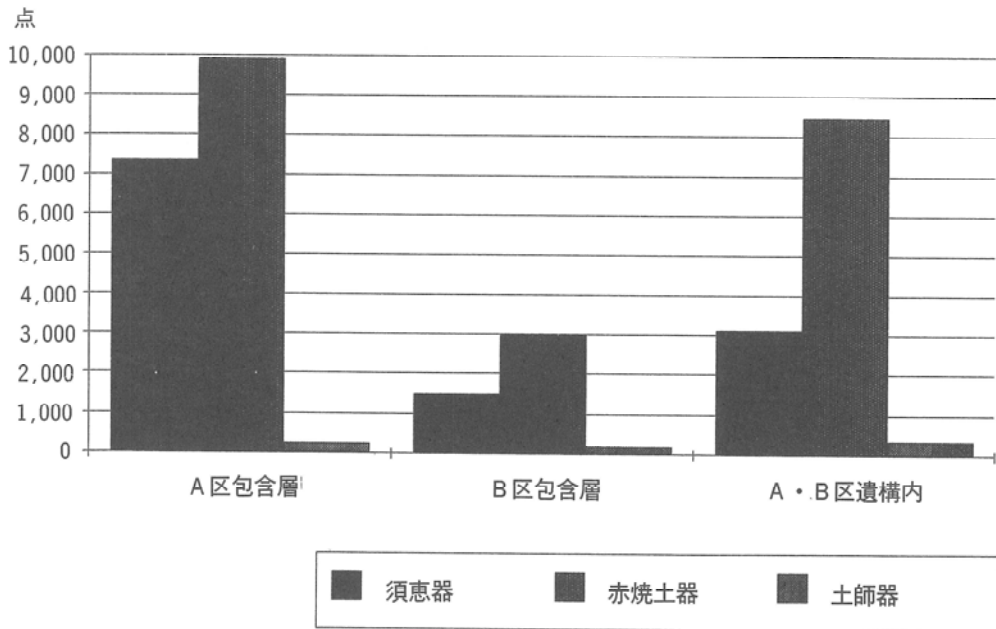
86は北陸系の双耳瓶の耳部（取っ手）の破片である。1点の出土だけである。

墨書土器が22点出土しており、すべて須恵器である。判読できた文字種には「入」4点、「九」6点、「十」2点、「才」、「千」、「三」、「万」、「佐」、「見」が各1点ある。墨書された土器の器種は蓋、坏、高台坏である。墨書位置は蓋ではつまみ部・外面で、坏・高台坏はいずれも底部にある。文字は42の「九」のように小振りに隅のほうに書かれたものと、41の「見」のように中心に大振りに書かれたものに分けられる。口縁部から体部にかけて、人為的な打ち欠きが観察されるものもある（58・62・64）。

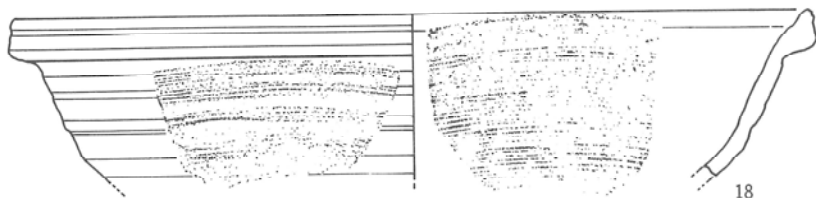
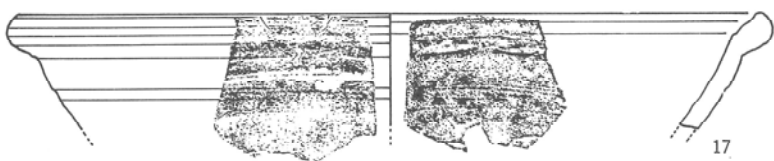
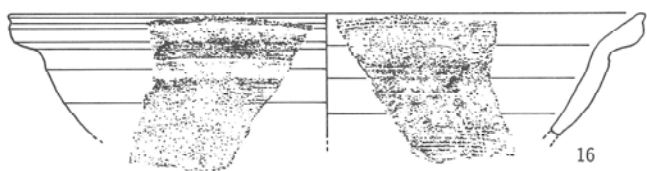
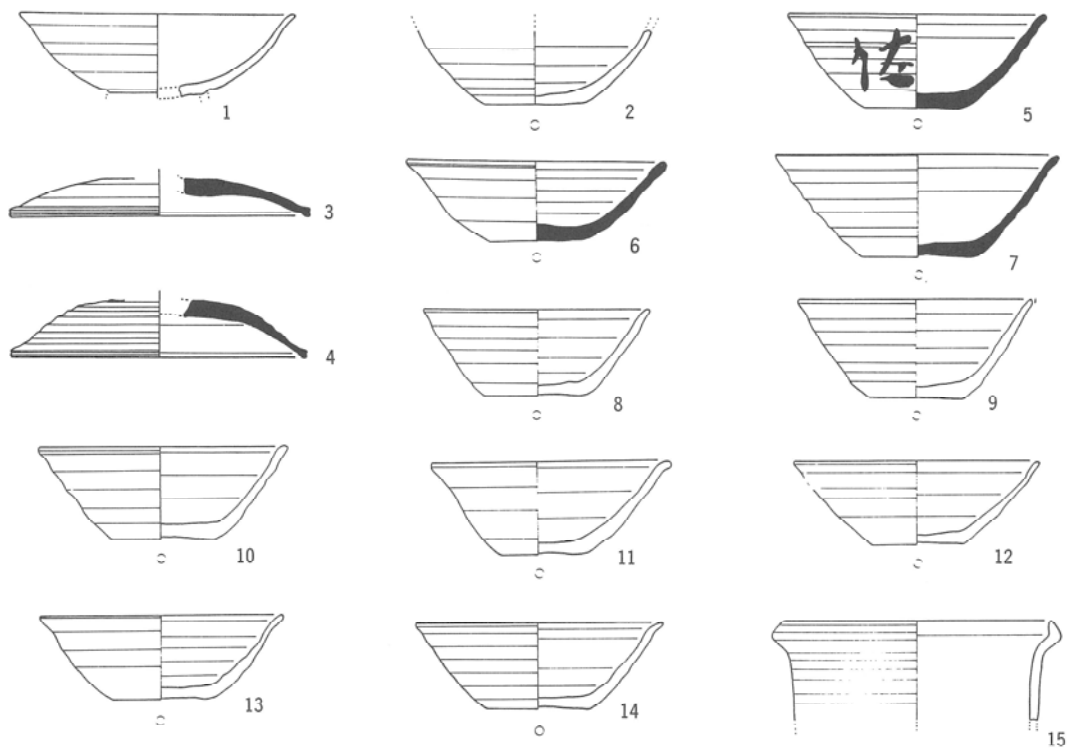
なお、SD400・540出土の墨書土器を見るに墨書銘の集中化は見られない。両溝状遺構での墨書土器を含めた出土状態に何らかの意味合いがあるのかは不明である。

表3 手蔵田5遺跡土器集計表

	須恵器	赤焼土器	土師器	計
A区包含層	7,375 (42.0%)	9,919 (56.5%)	270 (1.5%)	17,564
B区包含層	1,516 (32.2%)	3,005 (63.9%)	184 (3.9%)	4,705
A・B区遺構内	3,151 (26.3%)	8,447 (70.6%)	374 (3.1%)	11,972
計	12,042	21,371	828	34,241



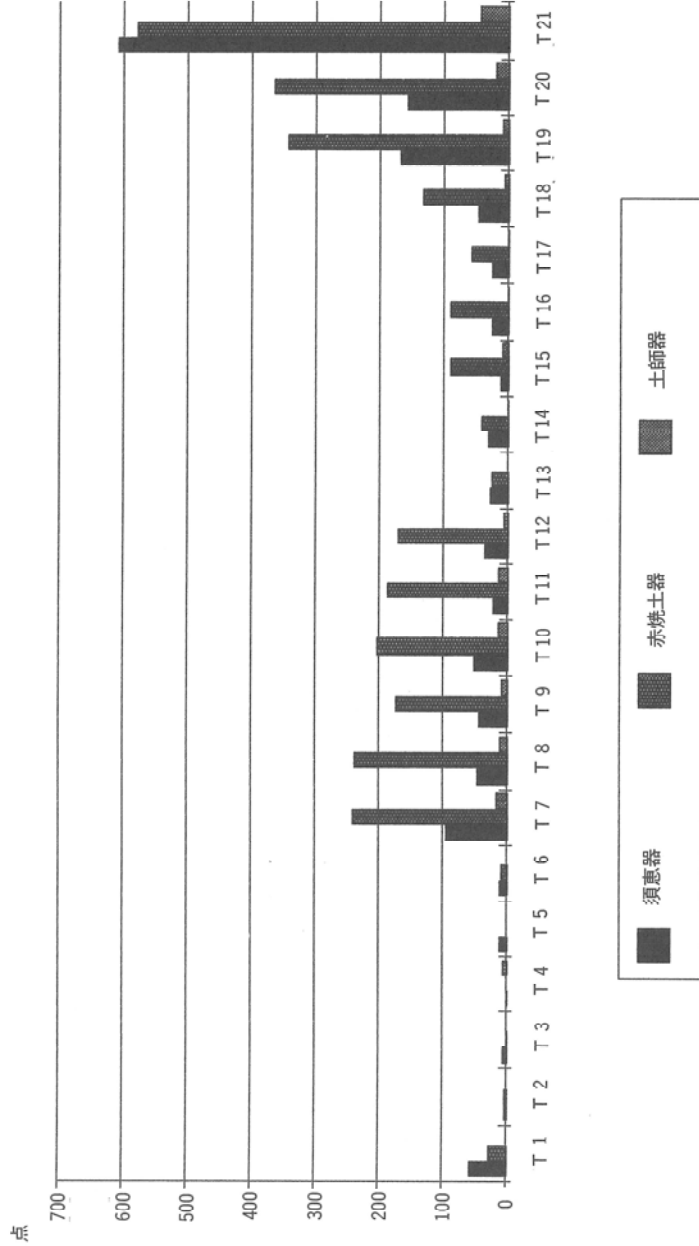
第12図 手蔵田5遺跡土器集計グラフ



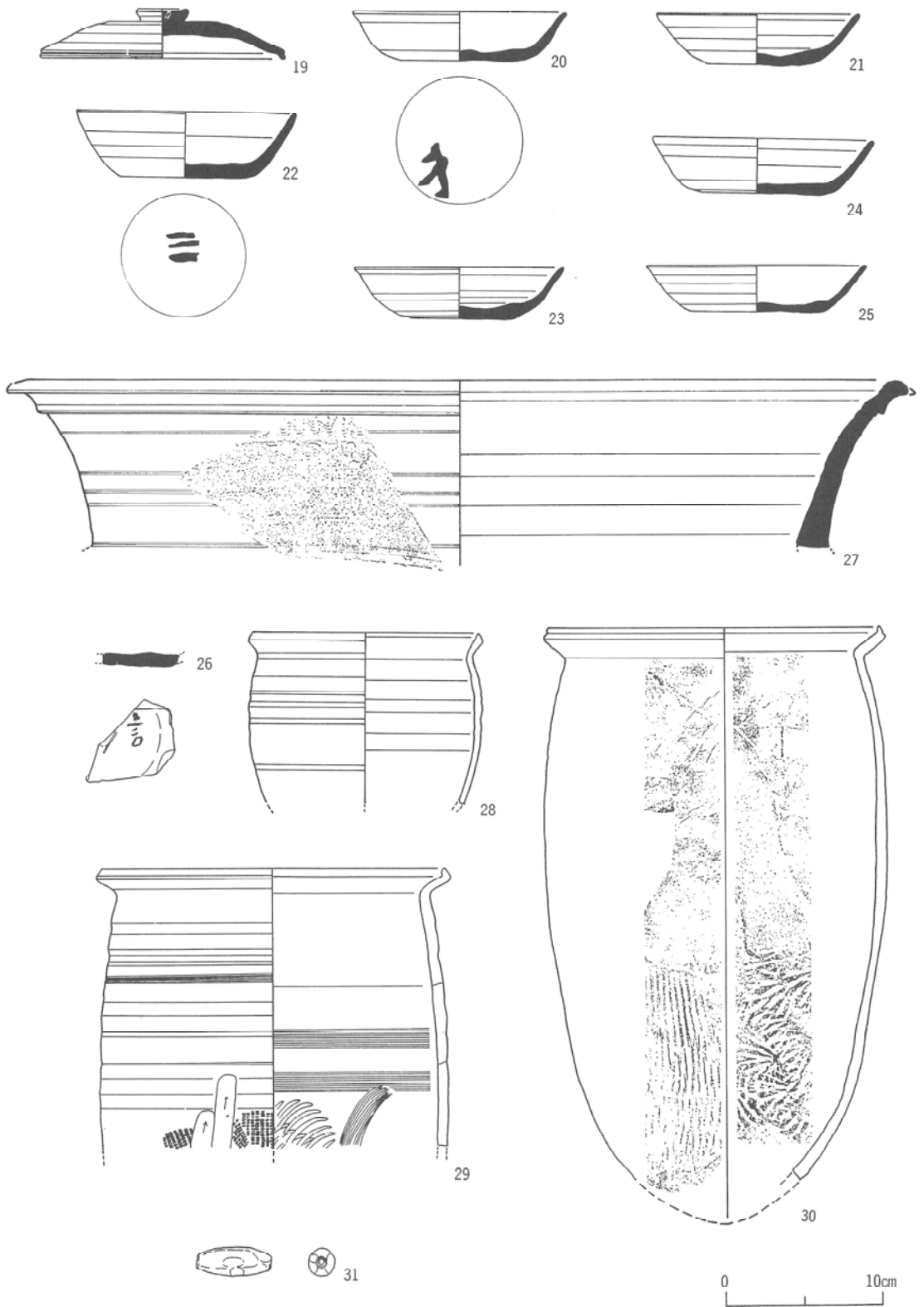
第13图 S D21出土土器

表4 B区トレンチ別土器集計表

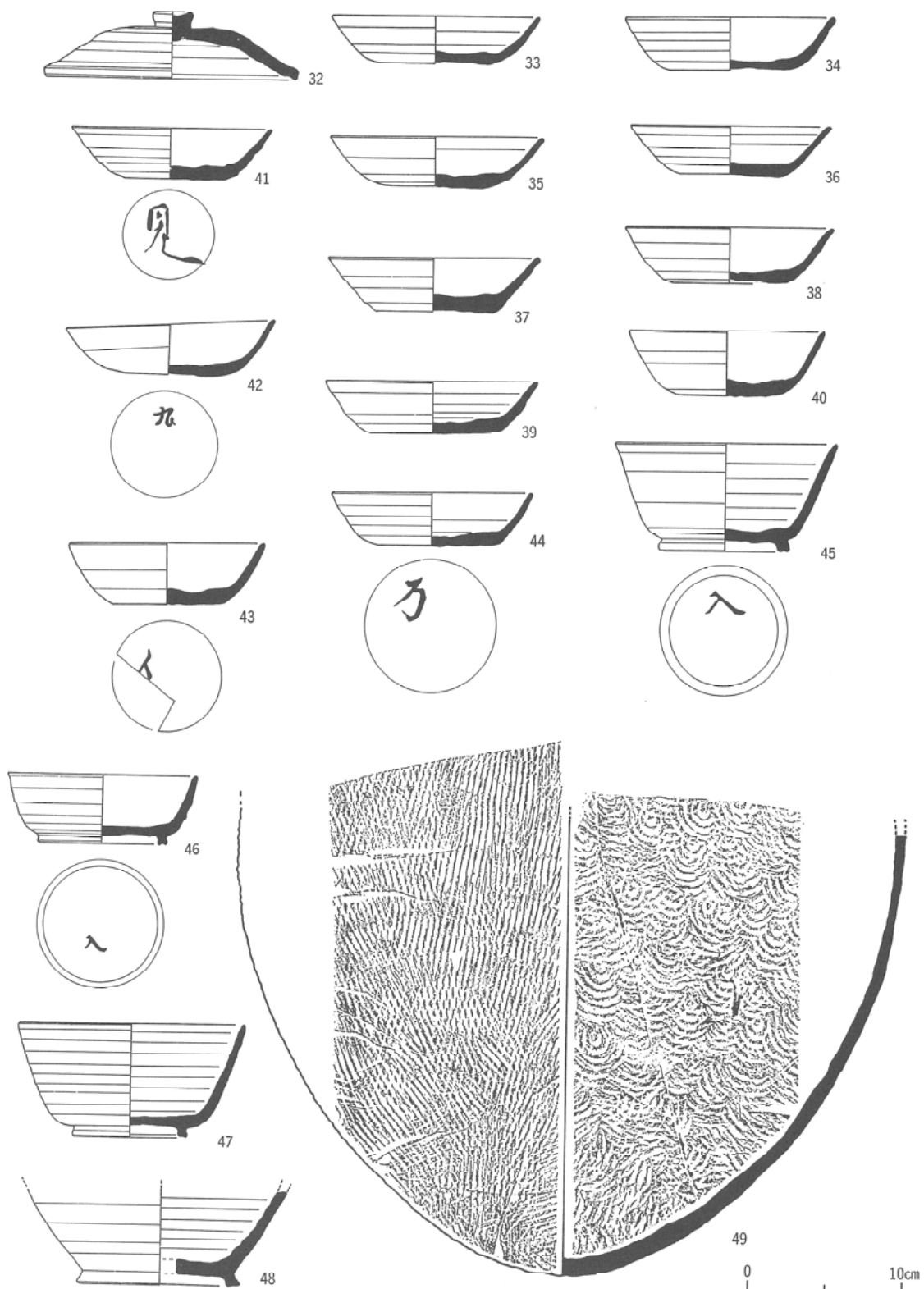
	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	T13	T14	T15	T16	T17	T18	T19	T20	T21	計
須恵器	58	5	8	3	13	13	98	47	44	53	24	37	30	31	13	27	25	47	170	158	612	1,516
赤焼土器	29	4	2		11	243	239	175	204	188	173	25	42	92	91	58	134	347	367	581	3,005	
土師器				8			18	12	11	14	14	8		2	9	3	2	8	11	20	44	184



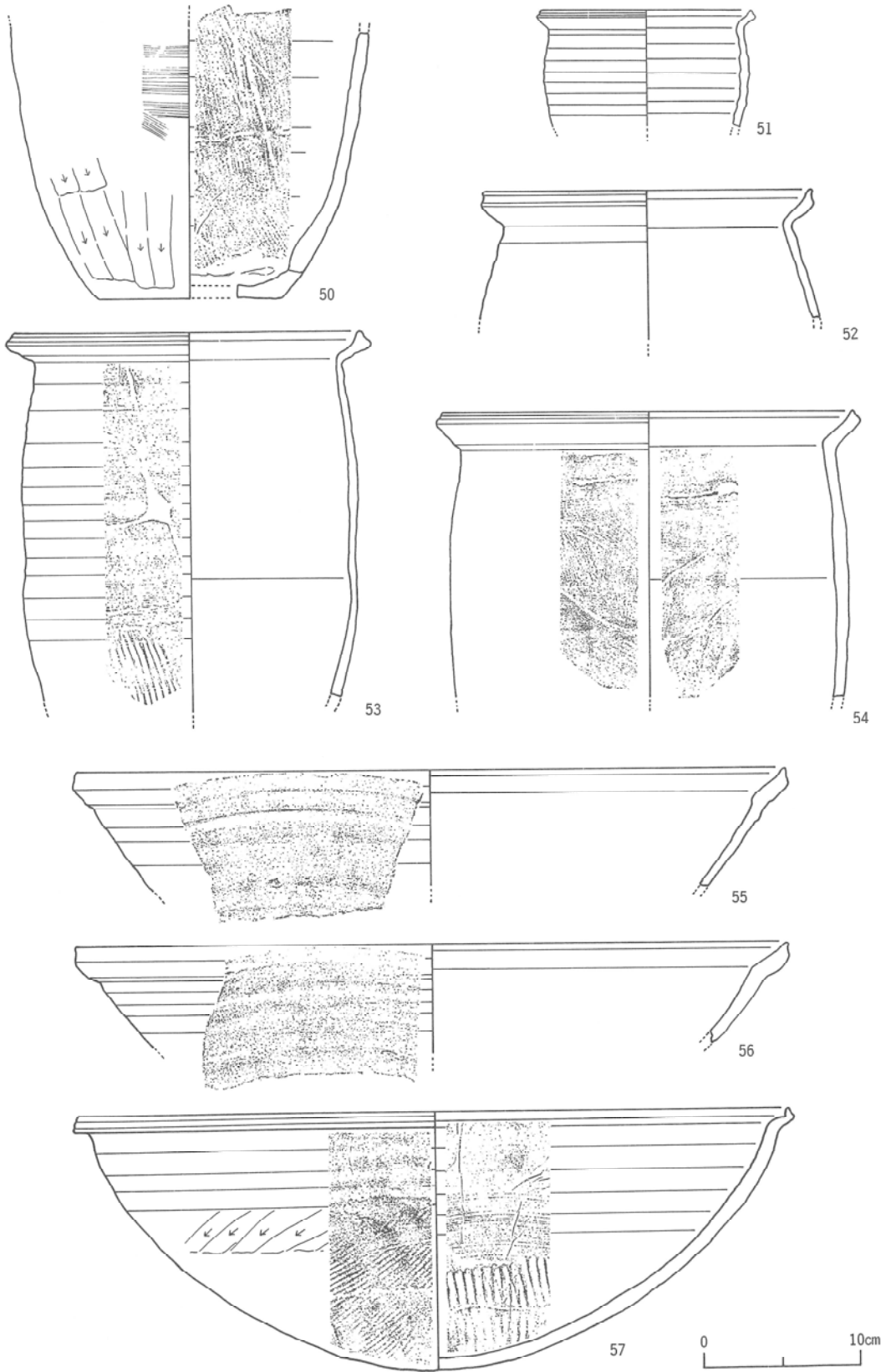
第14図 B区トレンチ別土器集計グラフ



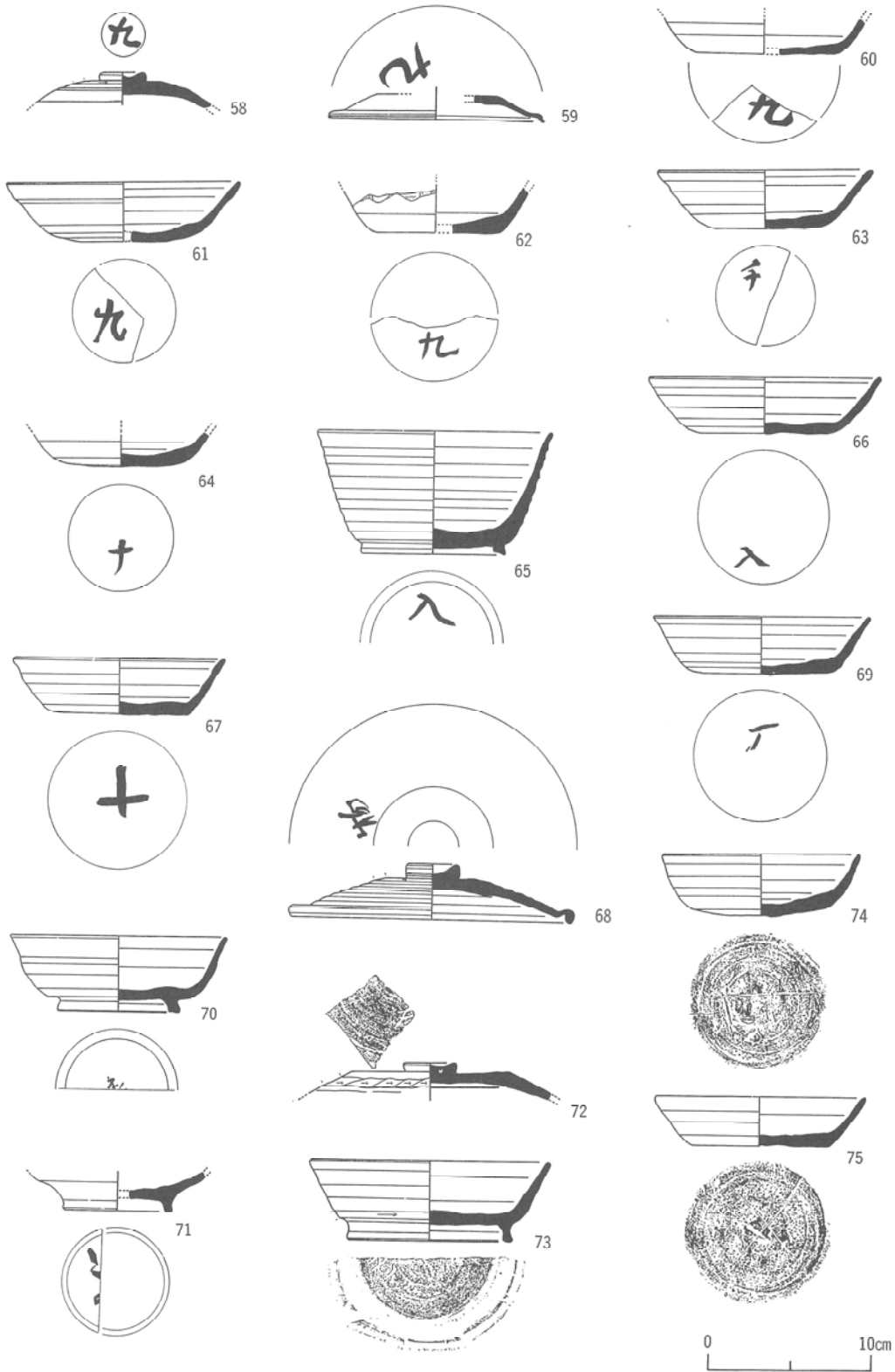
第15图 S D 540出土土器



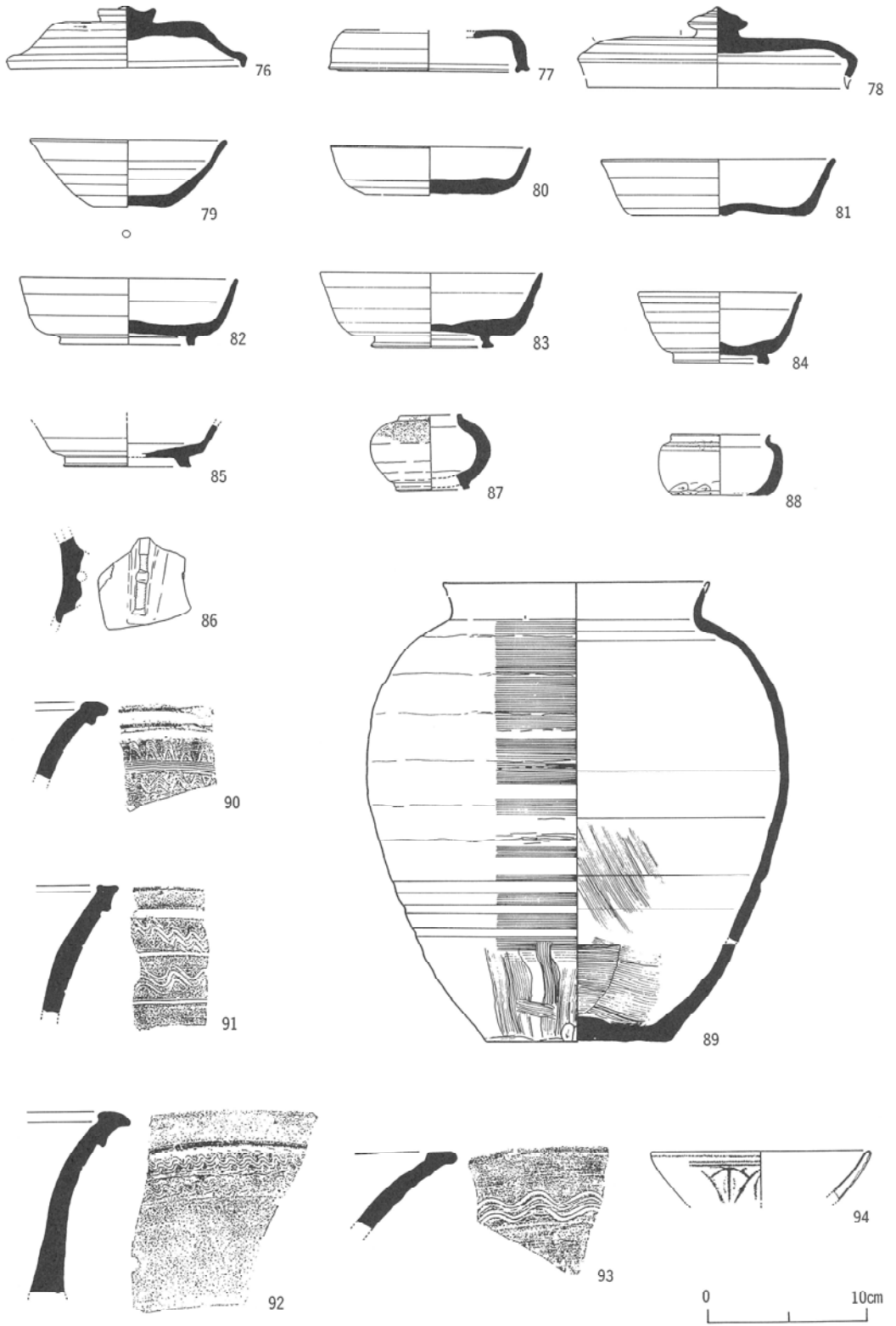
第16图 S D 400出土土器(1)



第17图 S D400出土土器(2)



第18図 墨書土器・ヘラ書き土器



第19圖 他遺構・包含層出土土器

表5 手蔵田5遺跡土器観察表

種別	器種	遺物 番号	計測値 m/m				胎土	焼成	技法・特徴			墨書 他	備考	出土地点		
			口径	頸径	胴径	底径			器高	外面	内面				底部	
土師器	高台	高台(145)					細砂混	良	ロクロ	磨き・黒色化						
	坏	2				50	細砂混	良	ロクロ	磨き・黒色化	回糸切					
須恵器	蓋	3 (160)					細砂混	堅	ロクロ	自然釉						
		4 (156)					細砂混	堅	ロクロ・自然釉	ロクロ・自然釉						
	5	135			54	49	粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	回糸切	外面「佐」カ				
	6	(137)			48	45	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切					
	7	(152)			60	55	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切					
	8	120			55	45	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切					
	9	126			50	50	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切			S D21		
赤 焼 土 器	坏	10	125			55	48	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切				
		11	(126)			45		粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切				
	12	(130)			50	45	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切					
	13	(130)			(50)	44	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切					
	14	130			55	45	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切					
	甕	15	144					粗砂混	良	ロクロ	ロクロ					
		16	(334)					粗砂混	良	ロクロ・ハケ目	ハケ目					
		17	(392)					粗砂混	良	ロクロ	ロクロ・ハケ目					
		18	(420)					粗砂混	良	ロクロ・ハケ目・煤	ハケ目					
	須 恵 器	蓋	19	(150)				31	粗砂混	良	ロクロ					
			20	(136)			80	31	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「才」カ		
		21	130			60	32	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		22	(140)			80	41	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「三」			
		坏	23	135			70	30	緻密	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕			
24			140			75	35	緻密	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
25			(140)			(80)	31	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕			S D540	
26								細砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「言」			
赤 焼 土 器	甕	27	(580)					細砂混	堅	ロクロ・自然釉・波紋	ロクロ					
		28	(144)	(136)	(150)			粗砂混	良	ロクロ・煤	ロクロ					
		29	220	200	223			粗砂混	良	ロクロ・タタキ・ハケ目・削り	ロクロ・アテ痕・ハケ目					
		30	210		(220)		<380>	粗砂混	良	ロクロ・タタキ・ハケ目・削り・煤	ロクロ・アテ痕					
土	鍾	31	長さ49	径19	孔径6											
須 恵 器	坏	32	(160)				42	緻密	堅	ロクロ	ロクロ					
		33	135			70	30	緻密	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		34	135			70	34	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		35	135			60	31	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		36	130			65	30	細砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		37	135			75	35	緻密	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		38	135			75	35	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		39	135			75	33	細砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切				
		40	(127)			70	40	細砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕				
		41	128			60	33	粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ・墨痕	ヘラ切・巻痕	底部「見」カ		S D400	
		42	135			70	35	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「九」			
		43	(126)			70	40	細砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「人」カ			
		44	130			85	35	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「万」			
		高 台 器	高台	45	143			84	71	粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「入」	
				46	(122)			82	45	緻密	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「入」	
			坏	47	(145)			74	73	細砂混	堅	ロクロ・自然釉	ロクロ	ヘラ切・巻痕		
				48				(106)		緻密	堅	ロクロ	ロクロ			
		甕	49						緻密	堅	タタキ	アテ痕				
50					(120)		粗砂混	良	ハケ目・削り・ナデ	ハケ目						

種別	器種	遺物 番号	計測値 m/m					胎土	焼成	技法・特徴			墨書 他	備考	出土地点	
			口径	頸径	胴径	底径	器高			外面	内面	底部				
赤 焼 土 器	甕	51	(134)					粗砂混	良	ロクロ・煤	ロクロ				S D400	
		52	(206)					粗砂混	良	ロクロ・ハケ目	ロクロ・ハケ目					
		53	(220)	(190)	(222)				粗砂混	良	ロクロ・ハケ目・削り	ロクロ				
		54	(225)	235	250				粗砂混	良	ロクロ・タタキ・ハケ目	ロクロ・ハケ目				
	埴	55	(450)						粗砂混	良	ロクロ	ロクロ				
		56	(450)						粗砂混	良	ロクロ・煤	ロクロ				
		57	450				173		粗砂混	良	ロクロ・タタキ・ハケ目・削り・煤	ロクロ・アテ痕・ハケ目				
須 恵 器	蓋	58						緻密	堅	ロクロ・削り	ロクロ		外面「九」	打ち抜き	5-1-III	
		59	(130)					粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ		外面「九」		S D454	
	坏	60				(90)			粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「九」		7-4-III
		61	(142)			(60)	35		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「九」		7-12-IV
		62				(80)			粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「九」	打ち抜き	9-1-III
		63	(130)			60	35		粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「千」		S K521
		64				65			粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「十」	打ち抜き	S D304
		65	(142)			(82)	74		緻密	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「入」		S D476
	坏	66	(140)			80	35		粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部「入」		S D260
		67	130			84	35		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切	底部「十」		S K240
	蓋	68	(174)				33		粗砂混	不良	ロクロ・削り	ロクロ		外面「物」カ		T-32
		69	130			80	35		粗砂混	不良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部不明		S D606
	皿	70	(130)			73	45		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	底部不明		S D121
		71				(66)			緻密	堅	ロクロ	ロクロ	回糸切	底部不明		2-2-III
	蓋	72							粗砂混	不良	ロクロ・削り	ロクロ		ヘラ書不明	打ち抜き	S D457
		73	(148)			(100)	48		粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	ヘラ書不明		S K192
	坏	74	120			80	35		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	ヘラ書「一」		S X100
		75	(130)			85	28		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕	ヘラ書「×」		S D568
	蓋	76	(145)				38		粗砂混	良	ロクロ・削り	ロクロ				7-5-III
		77	(126)						粗砂混	良	ロクロ・ハケ目	ロクロ				3-3-III
78	(162)				<50>			粗砂混	堅	ロクロ・削り	ロクロ				T-9	
	79	122			48	40		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	回糸切			S K190	
坏	80	124			80	30		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切			S X100	
	81	145			110	35		細砂混	不良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕			4-1-III	
高台坏	82	135			84	40		粗砂混	不明	ロクロ	ロクロ	ヘラ切			3-1-III	
	83	(137)			80	45		粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	ヘラ切・巻痕			4-2-III	
84	103				60	45		粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切			6-5-III	
	85				(80)			粗砂混	堅	ロクロ・削り・自然釉	ロクロ・自然釉	ヘラ切			5-13-III	
86								粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ				T-16	
	87	(38)	(41)	(75)	(41)			粗砂混	堅	ロクロ・自然釉	ロクロ				S K260	
88	(62)	(62)	(77)	(60)				粗砂混	良	ナデ・削り・自然釉	ロクロ・自然釉	削り			6-1-III	
	89	(165)	155	260	115	<286>		粗砂混	堅	ロクロ・ハケ目・削り・自然釉	ロクロ・ハケ目・ナデ	ナデ				
90	(350)							細砂混	堅	ロクロ・波紋・沈線・自然釉	ロクロ				9-1-III	
	91							粗砂混	良	ロクロ・波紋・沈線	ロクロ				10-9-III	
92	(800)							粗砂混	堅	ロクロ・波紋	ロクロ・自然釉				5-7-III	
	93	(560)						粗砂混	堅	ロクロ・波紋	ロクロ				4-1-III	
青磁	碗	94	(136)					緻密	堅	鍋蓮弁・釉葉厚し					粉青色 11-1-III	

入 45

入 46

入 65

入 66

九 42

九 62

九 58

九 59

九 60

十 67

十 64

十 63

三 22

乃 44

在 5

言 26

才 20

見 41

物 68

家 96



72



73

第20図 墨書・ヘラ書き文字集成図 (実大)

2 手蔵田6遺跡

遺 構

土壇6基・溝跡9条・河川跡2条・ピット等、総計30の遺跡が検出された。遺構の分布状況は、調査区東側のT25付近で小規模な遺構のまとまりが見られる。T26・27とT30・31で河川跡がそれぞれ検出された。その間のT28・29で遺構は全く検出されていない。調査区東端のT32～34で遺構の検出が見られる。遺構検出面は表土より約32cm下のⅢ層上面である。検出面の標高はT33付近が一番高く4.82mほど、河川跡のあるT26～31は最低で4.72mである。土質はⅡ層・Ⅲ層とも粘土質の強いグライ化土壌である。

S K11土壇はT25中央北側で検出された。北側は調査区外にあたり平面形は不明である。東西幅2.46m・南北1.60mまで検出された。深さは28cmを測る。壁面は緩やかな傾斜で、底は平坦である。重複関係はない。遺物は赤焼土器と須恵器の出土がある。底面より赤焼土器坏(96)が出土している。

S G 6・7河川跡はT30・31とT26・27で検出された。どちらも幅が約12m・深さ約30cmを測る。流水方向は不明だが、N-45°~53°-Eの方位をしめす。調査区内で溝間の距離は約40mである。埋土は1層で黒色の粘質土である。遺物は須恵器と赤焼土器が少量出土している。

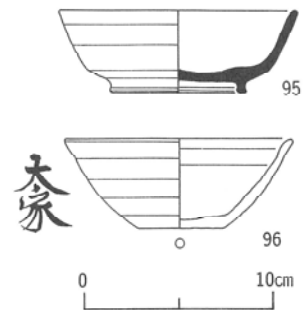
S D 8溝状遺構はT34西側にある。規模は東西の長軸約5m、幅50cm・深さ9cmを測る。重複関係はない。西端の埋土上層からは赤焼土器が多く出土している。

遺 物

遺物は整理箱に2箱程出土した。そのほとんどが須恵器と赤焼土器片である。遺構の検出状況に符合するように、包含層出土の土器にも頻度が見られる。T27～31にかけては微量である。

S K11出土の赤焼土器坏の外面には「大家」の墨書がある。底部に土取りと、底面には回転糸切り痕がある。

なお、第18図68の須恵器蓋は手蔵田6遺跡のT32より出土したものである。



第21図 出土土器

表6 手蔵田6遺跡土器観察表

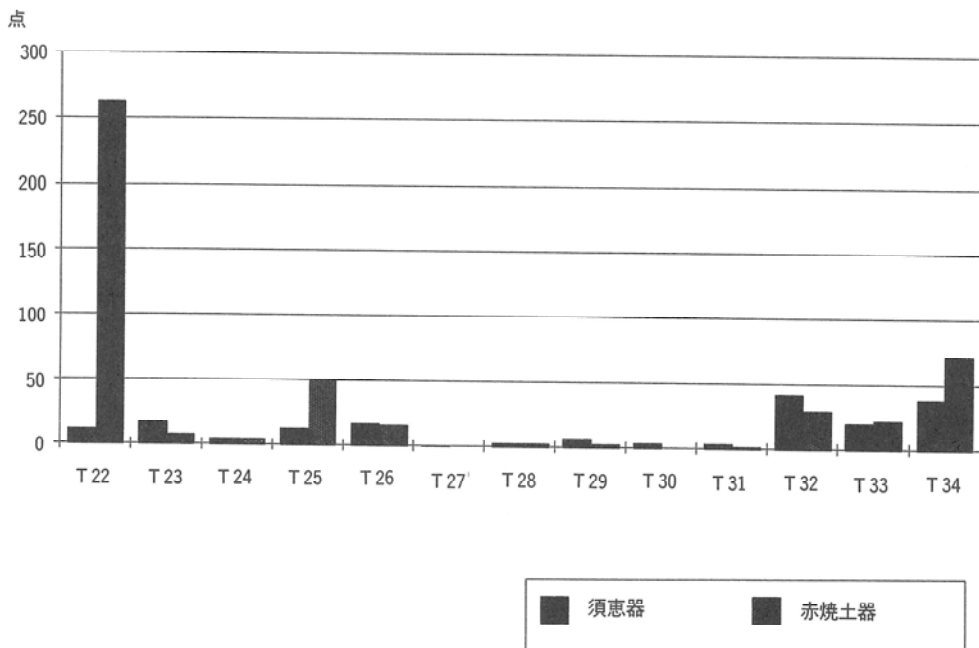
種別	器種	遺物番号	計測値 m/m				胎土	焼成	技法・特徴			墨書 他	備考	出土地点	
			口径	頸径	胴径	底径			器高	外面	内面				底部
須恵器	高台坏	95	(162)			78	45	粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	ヘラ切			T-34
赤焼土器	坏	96	120			50	48	粗砂混	良	ロクロ	ロクロ	回糸切	外面「大家」		S K11

表7 手蔵田6遺跡遺構出土土器集計表

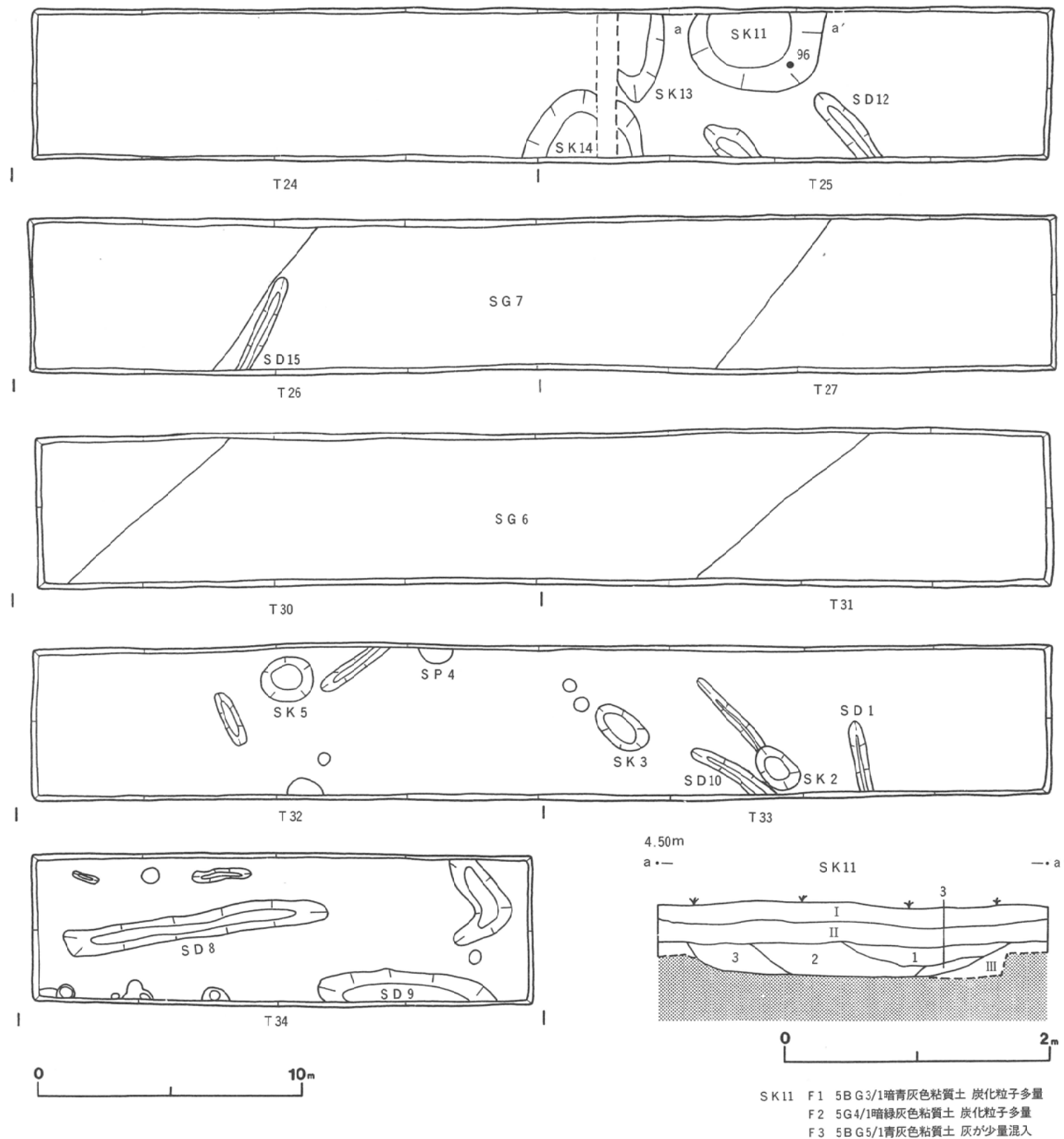
出土地点	TNo	須恵器	赤焼土器	計
SD1	33	1	2	3
SK2	33	3	14	17
SK3	33	1	2	3
SP4	32	1		1
SK5	32	3	3	6
SG6	30・31	8	4	12
SG7	26・27	3	2	5
SD8	34	18	53	71
SD9	34	2	7	9
SD10	33		1	1
SK11	25	25	61	86
SD12	25		1	1
SK13	25	3	14	17
SK14	24		5	5
SD15	26		13	13
計				250

表8 手蔵田6遺跡トレンチ別土器集計表

T No	須恵器	赤焼土器	計
T 22	13	263	276
T 23	18	8	26
T 24	5	5	10
T 25	14	51	65
T 26	18	17	35
T 27	1		1
T 28	3	3	6
T 29	7	3	10
T 30	4		4
T 31	4	2	6
T 32	43	30	73
T 33	21	23	44
T 34	39	72	111
計			667



第22図 手蔵田6遺跡トレンチ別土器集計グラフ



第23図 手蔵田6遺跡検出遺構

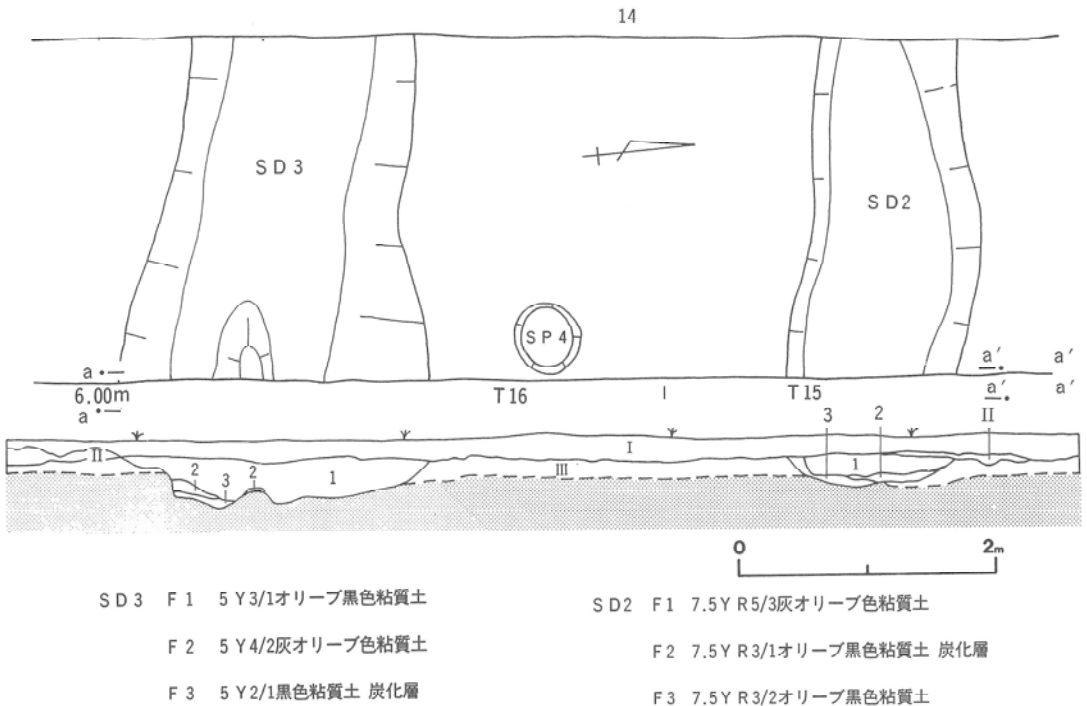
3 手蔵田9遺跡

遺 構

手蔵田9遺跡の調査は、水路設置箇所には幅3m長さ5mのトレンチを5mおきに設定して行なった。その結果検出され遺構には、溝跡と考えられる遺構が3条と、ピットが1基であった。

遺構の分布状況は、調査区東側にかたよっている。西側にあたるT1～11で遺構は全く検出されていない。溝跡は調査区東半部、手蔵田10・11遺跡寄りのT12～17内に位置している。遺構検出面の標高は5.45mで、表土からは約12cm下にあたっている。

SD1溝跡はT12内西側で検出された。南北方向に伸びるものである。遺構が確認されたのは表土下約14cmで、II層を掘り込んでいる。上端の幅は約3m、深さは平均40cmを測る。長さはトレンチ幅である2.94mまで検出されている。壁は比較的緩やかで、底面中央部は微細な起伏があり、少し盛り上がっている。埋土は2層に分かれるが、1層は攪乱層である。出土遺物はない。近世以降の所産と考えられる。



第24図 SD 2・3 溝跡

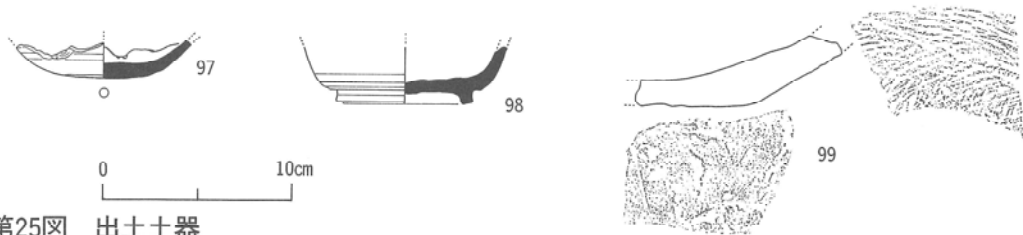
S D 2 溝跡はT15内に位置し、東西方向へ伸びるものである。確認面は表土下の約14cmのⅢ層直上面である。上端の幅は1.25m、深さは24cmを測る。長さは2.62mまで検出された。壁の断面形は弧形を呈している。埋土は3層に分かれており、全体に黒っぽく粘りがある。中でもF2層は炭化物が多量に混入しておりふかふかしている。S D 2 溝跡のF2層より曲物の底部と考えられる、半円形の木製品が出ている。遺物は須恵器坯の破片が出土している。

S D 3 溝跡は、T16内に検出された東西に伸びる溝跡である。S D 2 溝跡の南側に約2.74mの間隔をおいて並行している。遺構はⅢ層直上面から掘り込まれていた。上端の幅は1.70～1.93m、深さは約20～40cmを測る。長さは2.65mが検出されている。壁は南側は緩やかに落ち込むが、北側は浅く60cm程内側に入ったところでいきなり落ち込んでいる。底面には微細な起伏がみられた。埋土は3層に分かれている。その大部分を占めるF1層は炭化物と遺物を包含している。F3層は炭化土でもろく柔らかい。遺物は須恵器の高台坯および坯の底部、そして珠洲系陶器の摺鉢の底部が出土している。溝跡の時期は、珠洲系陶器摺鉢が出土しているところから、中世代の所産と考えられる。

包含層から遺物の出土があったのはT8～10にかけてであった。数はそれほど多くはないが、赤焼土器と須恵器がそれぞれ出土している。

調査区の東方約80mには、昭和62年度に県教育委員会が発掘調査を行った、手蔵田10・11遺跡がある。中世13世紀後半～14世紀前半の遺跡で、土壌や溝跡・塚等が検出された。

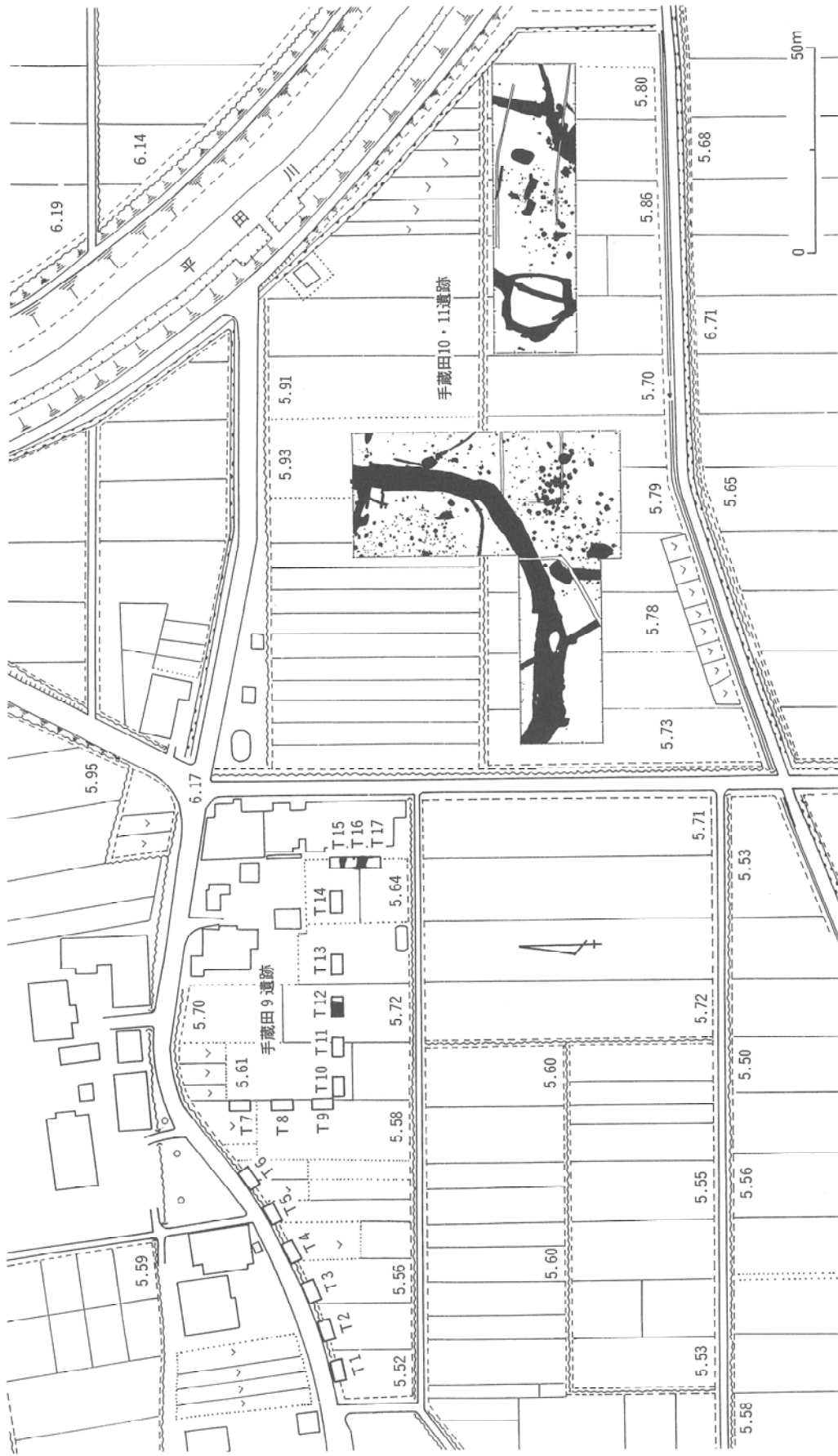
手蔵田9遺跡は第26図の概要図でも見て取れるように、当地一帯に埋没する中世の遺跡の一部として考えて差し支えないものと思われる。



第25図 出土土器

表9 手蔵田9遺跡土器観察表

種別	器種	遺物番号	計測値 m/m					胎土	焼成	技法・特徴			墨書 他	備考	出土地点
			口径	頸径	胴径	底径	器高			外面	内面	底部			
須恵器	坯	97				45	粗砂混	堅	ロクロ	ロクロ	回糸切		打ち欠き	S D 3	
須恵器	高台坯	98				(70)	粗砂混	堅	ロクロ・削り	ロクロ	ヘラ切・養痕				
珠洲系陶器	甕	99					細砂混	堅	タタキ		置造り		III-IV期		



第26図 手蔵田9・10・11遺跡概要図

4 本川遺跡

遺 構

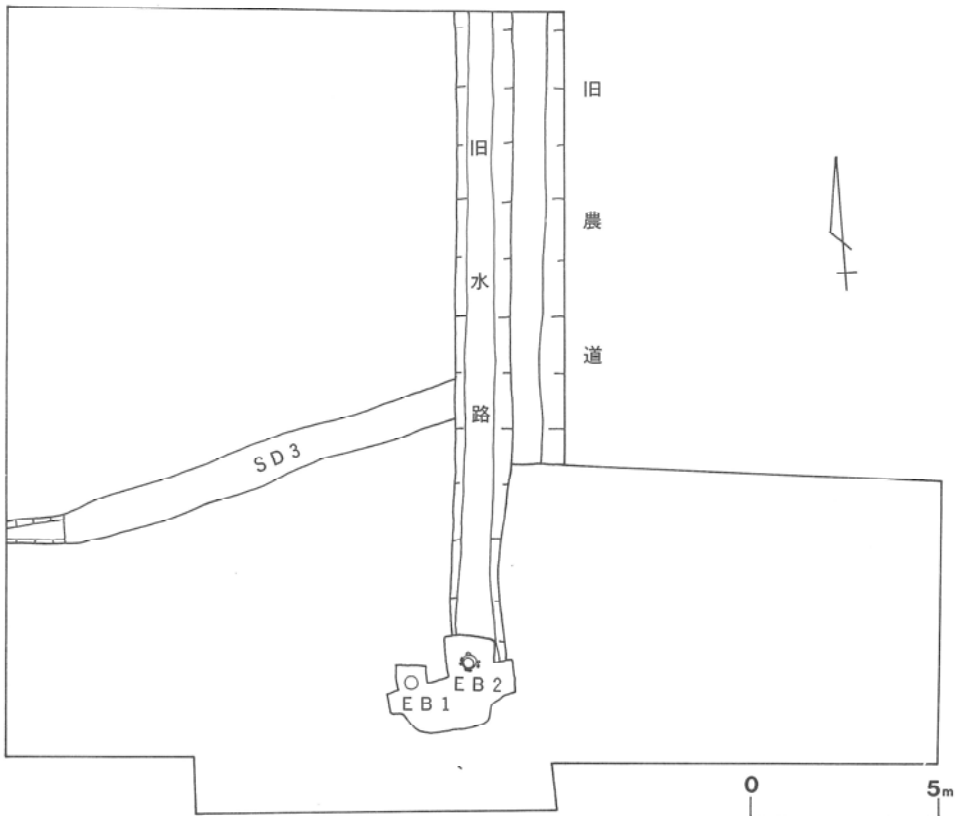
今回の調査で検出された遺構は、柱跡が2本と溝跡1条である。遺構検出面のⅢ層はグライ化が著しい。検出面の標高は4.70mで、表土からは約44cm下であった。

柱跡のEB1とEB2は、調査区の中央部南側で近接して検出された。どちらも柱根が比較的良好な状態で遺存していた。EB2は以前の耕土整理の際に発見されており、用水路の中にその先端部分を露出していた。柱の掘り方はグライ化していて確認できなかった。柱根周辺の土質は青灰色のシルトと粗砂が交互に混ざったものである。柱の間隔は心々で約1.65mである。この2本は真北に対して $N-72^{\circ}-E$ の方向で並んでいる。

EB1は柱列東側にある。柱根は断面がほぼ円形を呈し、直径38cm・残長64cmを測る。柱材の残存する上端部分は山形に腐敗している。

EB2は円柱で、直径約55cm、長さ約76cmが残存する。柱根の上部約20cmは風化し滑らかになっている。検出面から約60cm下までである土中部分の遺存状態は良好である。

柱根の整形は、側面に削跡が観察される。低部には1辺8～10cmの方形の貫通した穴が



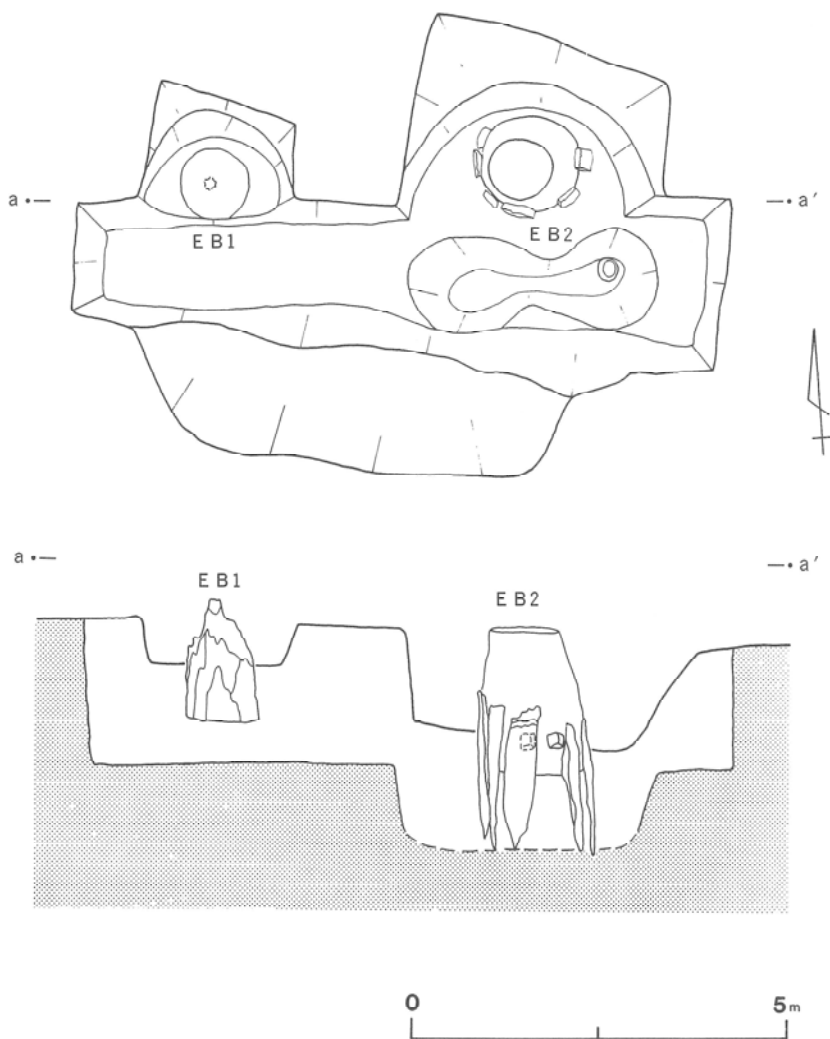
第27図 本川遺跡検出遺構

2ヶ所あけてある。底面は斜めに切り込まれている。

また、この柱根の周縁には矢板が打ち込まれている。11本あり柱根の底部よりさらに40cm下にまで打ち込まれていた。矢板は残長約38cm・68~78cm、幅12~14.5cm、厚さは1.5~3cm程のものである。先端部は削って尖らせてある。このうち、矢板の製作状況が分かる資料がある。板材を割り裂いたものとみられるもので、板面が接合できたものが2枚、それとは別の矢板3枚が接合できた。

遺物

今次調査区からの遺物は極めて少量で包含層から出土したものだけである。土師器片10数点と赤焼土器の甕（回転糸切り底部）、須恵器の壺（頸部）・高台坏（底部）などがある。



第28図 EB1・2柱根

第5章 調査のまとめ

今回の手蔵田5・6・9遺跡・本川遺跡の調査は、昭和63年度県営ほ場整備事業（中平田東地区）に先立つ記録保存のための緊急発掘調査である。調査は昭和63年5月12日から同年7月29日にかけての延べ55日間行った。調査対象となったのは、ほ場整備面工事区域および排水路施工区域内である。以下遺跡毎に調査の結果をまとめる。

手蔵田5遺跡（A区・B区）

A区の調査面積3,350㎡、B区は630㎡である。A区は面調査をおこない、その北方30mのB区はトレンチ調査（T1～T21）をおこなった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡10棟、建物跡の一部または塀跡と考えられる柱列5列、集落の西側部分を区画する板材列1列、土器が棄却された溝状遺構2条、調査区を南北に縦断する道路状遺構1条、堅穴住居の可能性のある性格不明遺構3基、墓壇1基（近代の馬の墓）、その外多数の小溝状遺構・土壌・柱穴・ピット等である。登録遺構総数は710を数える。

遺構は現地表面から約30cm下のⅢ層を掘り込んでいる。土壌はグライ化傾向にあるが遺構の遺存状態はおおむね良好であった。手蔵田5遺跡の中心部は、遺構の分布状況や方向性、あるいは遺構調査区の北東側に広がっているものと考えられる。

当遺跡近辺で板材列が検出された遺跡は、熊野田遺跡・南興野遺跡・生石2遺跡・俵田遺跡等がある。本遺跡は、一時期板材列が集落を囲みその内側に掘立柱建物跡が立ち並ぶ生活が幾世代かの間営まれていた様相が推測できる。

遺物は整理箱にして83箱出土した。包含層から22,328点、遺構内からは11,972点である遺構内出土土器は赤焼土器が約7割を占め、次いで須恵器3割弱、土師器は1割にも満たない割合となっている。木製品の出土はほんの僅かである。A区のSD400とSD540溝状遺構から一括して出土している土器は、器種構成や形態から8世紀の所産と考えておきたい。

その他の出土遺物等考え併せると、本遺跡は8世紀末ごろから11世紀代ごろまでの間の所産と考えられる。

手蔵田6遺跡

調査は手蔵田5遺跡のB区と同様、排水路施工部分についてのトレンチ調査である。調査区はB区をちょうど200m東方に延長した線上にある。本川遺跡からは北東約120mに位

置する。調査面積は390㎡で、土壇6基・溝跡9条・河川跡2条・ピットなど30におよぶ遺構を検出した。

遺構検出面の標高は約4.8mを測る。Ⅲ層は粘性のきつい青灰色土層でグライ化も強い。遺構の遺存状態はあまり良くない。

旧河川跡と2条は浅いものであるが、平安時代の遺物が出土しており、当遺跡が河間低地の微高地に立地していたことをしめすものと言える。

遺物総数は整理箱で2箱ある。内訳は包含層から667点・遺構内出土は250点を数え、そのほとんどが須恵器と赤焼土器である。遺物の分布状況を見ると河川跡をはさんで西側のT22付近がもっとも遺物の出土数が多い。T22以西に遺構の集中地域のある可能性が高いものと見られる。河川跡の東側のT32以東も遺物の出土数が多い。

墨書土器が2点出土している。旧河川跡西側のT25にあるSK11土壇の底から「大家」の墨書ある赤焼土器の坏と、T32から「物」の墨書ある須恵器の蓋である。

また、今次の調査区は手蔵田6遺跡範囲の西半分にあたる。農道をはさんだ東側は、昭和62年度に酒田市教育委員会が発掘調査を行い、報告書が刊行されている。遺跡の時期は9世紀後半代を中心として集落が営まれ、その後、13世紀およびそれ以降に、生活の場・生産の場としていたことがうかがわれるとしている。今次の調査区で出土した遺物も、9世紀後半以降の所産と考えられる。

手蔵田9遺跡

排水路対象区を幅3m×長さ5mのトレンチを5mおきに入れた。調査面積は260㎡である。昭和62年度に県教育委員会が発掘調査した手蔵田10・11の調査区の東側にあたる。

検出遺構は溝跡3条・ピット1基である。遺構検出面は表土より約12cmのⅢ層中である。検出面の標高は約5.45mを測った。

遺物は整理箱に1箱出土した。須恵器・赤焼土器が主流であるが、SD3溝跡より珠洲系陶器の甕片や木製品も出土している。

手蔵田10・11遺跡は13世紀後半から14世紀前半にかけての所産と考えられている。本遺跡もその位置や出土遺物等から手蔵田10・11遺跡の範疇に一部入ることが考えられる。

本川遺跡

本遺跡の調査面積は395m²である。遺構検出面は表土から約44cm下の層中にある。標高は4.70mである。遺構の遺存状態はあまりよくない。検出遺構は柱跡2基と溝跡が1条である。柱跡出土の柱根の内1本は直径が55cmと巨大なものである。発掘調査以前から用水路内に露頭していた。

出土遺物は僅かでポリ袋に2つ程である。多い順に赤焼土器・須恵器・土師器片となっている。しかし遺物と柱跡との関連が不明なため、遺構の時期は今のところ特定出来ない。

当遺跡の遺跡範囲と見られるのは、本年度調査区から南方の本川部落人近までの細長い区域である。県教育委員会が行った昭和62年度分布調査（C調査）でこの南端にあたる本川部落北東部の一角で井戸跡・土壇などが検出されている。

参考文献

山形県教育委員会	境興野遺跡発掘調査報告書	第46集	1981年
山形県史編集委員会	山形県史 第1巻 原始・古代・中世編	山形県	1982年
山形県教育委員会	俵田遺跡発掘調査報告書	第77集	1982年
山形県教育委員会	手蔵田遺跡発掘調査報告書	第87集	1985年
山形県教育委員会	新青渡遺跡第1次発掘調査報告書	第67集	1985年
山形県教育委員会	手蔵田遺跡発掘調査報告書(2)	第98集	1986年
山形県教育委員会	南興野遺跡発掘調査報告書	第114集	1987年
山形県教育委員会	桜林興野遺跡発掘調査報告書	第115集	1987年
山形県教育委員会	生石4遺跡発掘調査報告書	第118集	1987年
酒田市教育委員会	手蔵田6・7遺跡発掘調査報告書	第1集	1987年
山形県教育委員会	分布調査報告書(15)	第119集	1988年
山形県教育委員会	手蔵田10・11遺跡発掘調査報告書	第124集	1988年

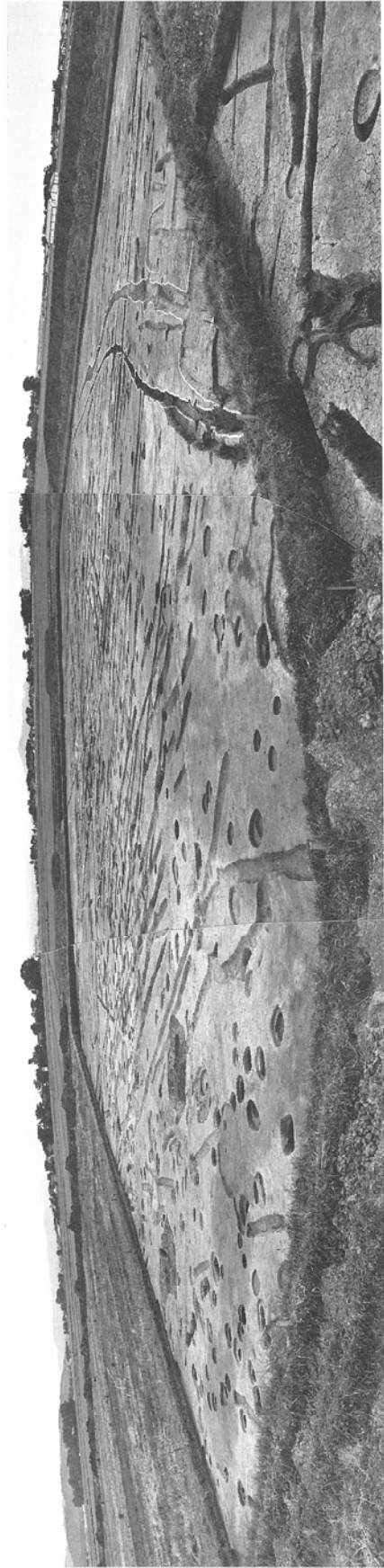
圖 版



遺跡遠景（南から）



A区調査風景（西から）



A区全景 (北から)



S F 120道路跡 (南東から)



S F 120道路跡 (南東から)



A 区近景 (南西から)



S D127溝跡 S A 500板材列 (南西から)



S A 500 板材列 (北東から)



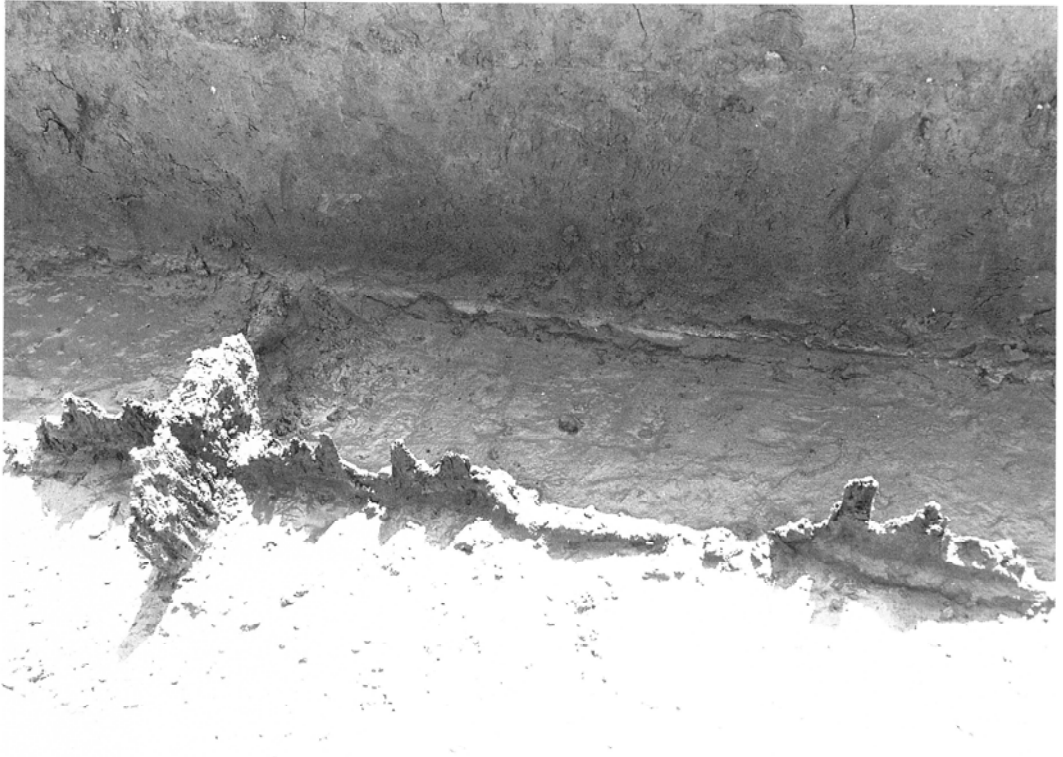
S A 500 板材列 (南東から)



S A 500北西コーナー（北西から）



S A 500北西コーナー（北西から）



S A 500 板材列配置



S A 500 板材列配置



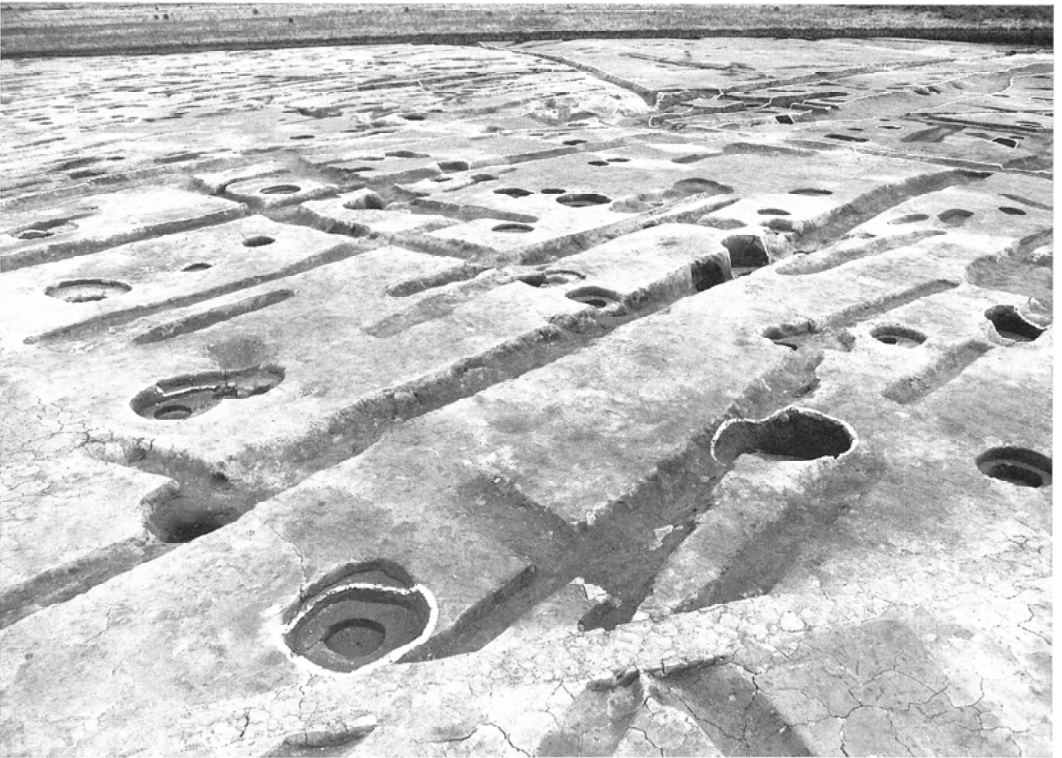
S A 500 布掘り土層 (南から)



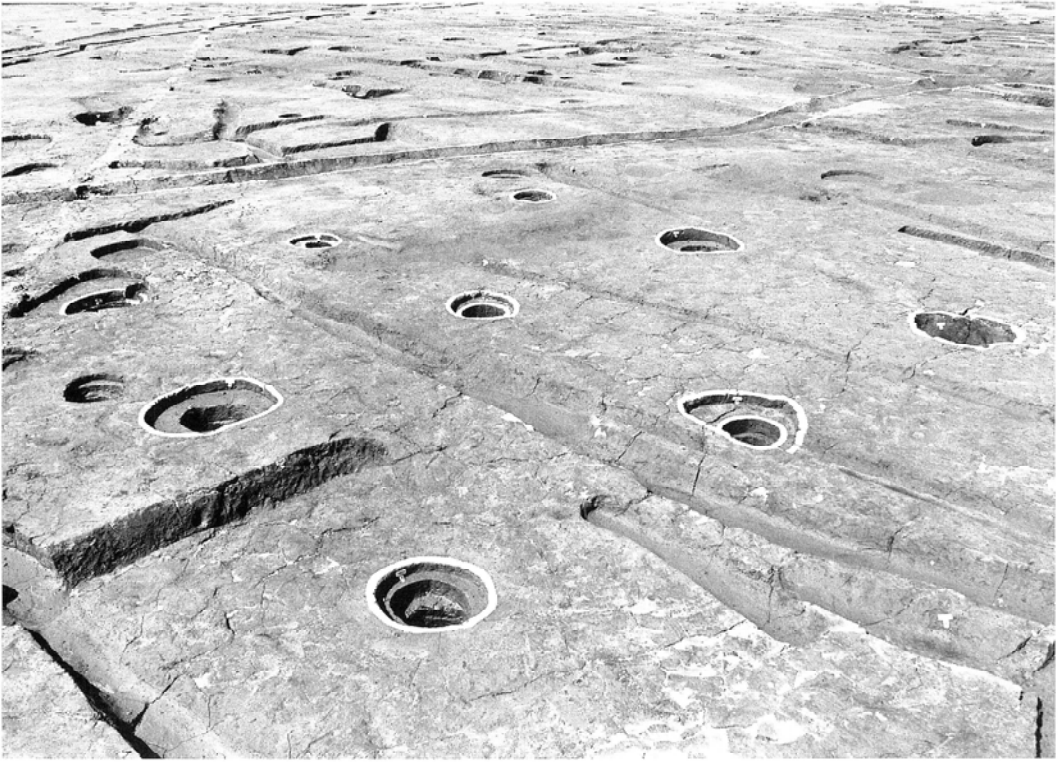
S B 600 建物跡 (南東から)



S B 600 建物跡 (南東から)



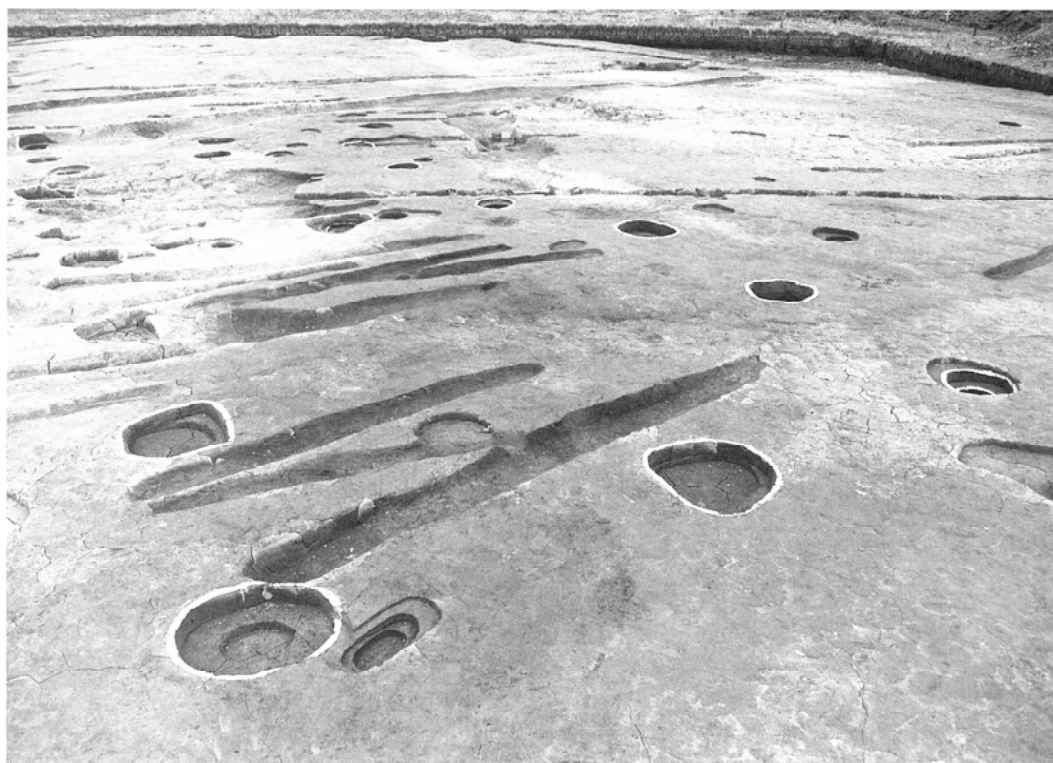
S B 600 建物跡 (北西から)



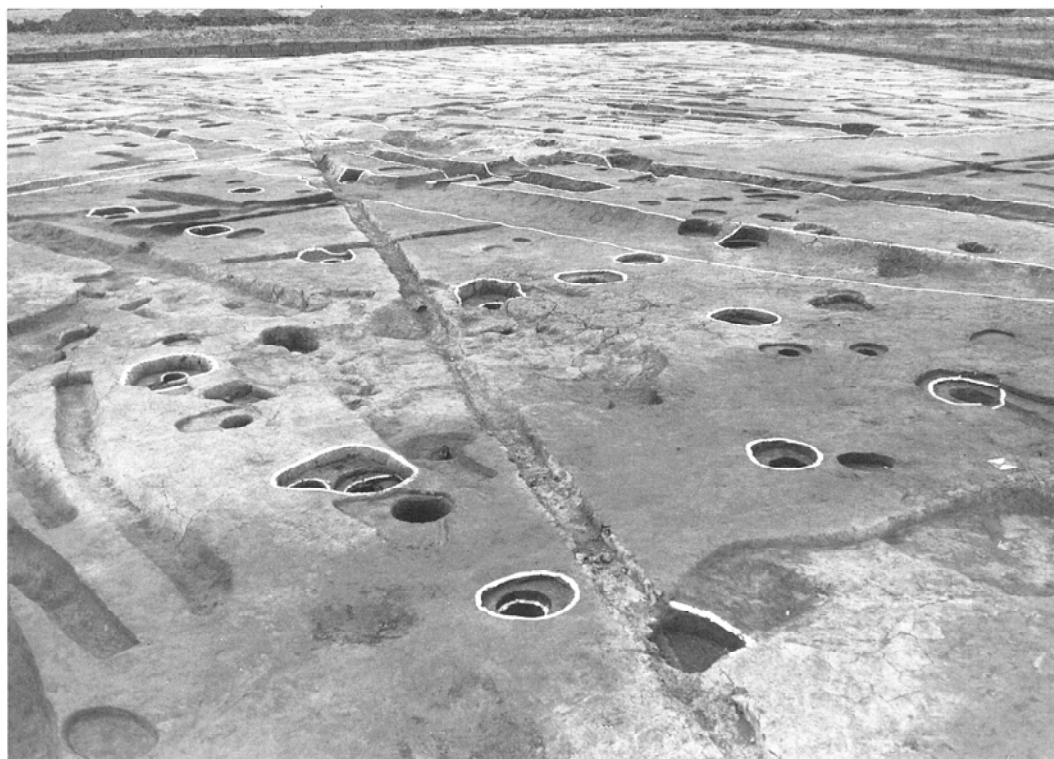
S B 650建物跡 (南西から)



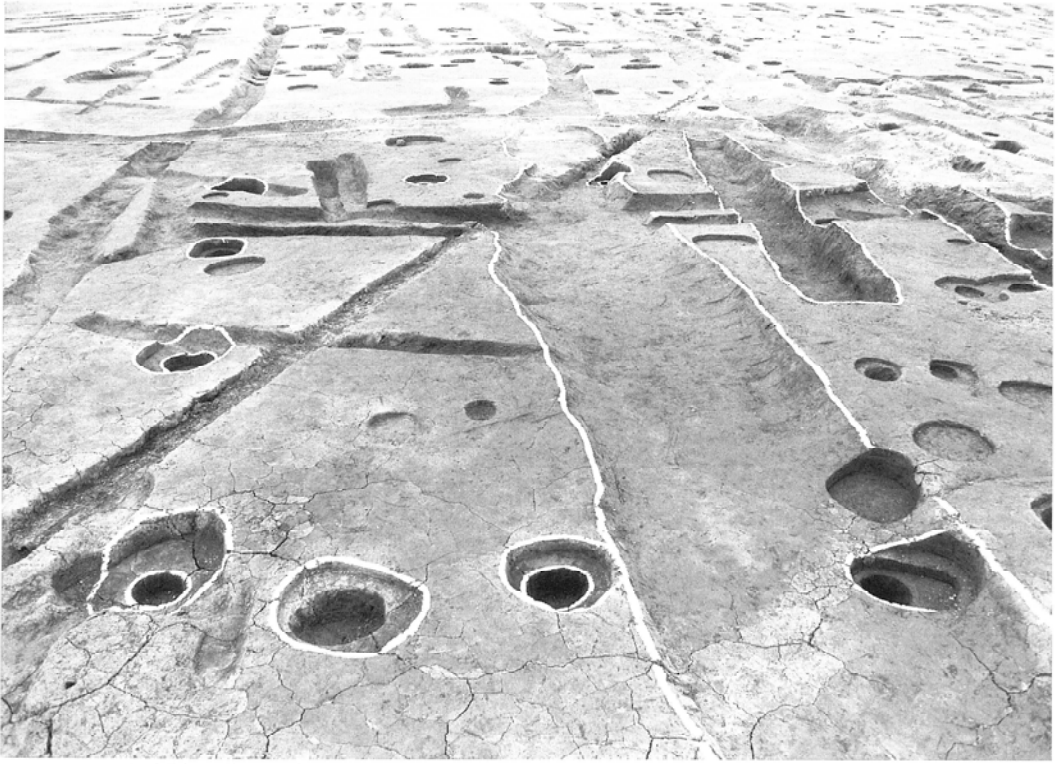
S B 650・660建物跡 (西から)



S B 660建物跡 (西から)



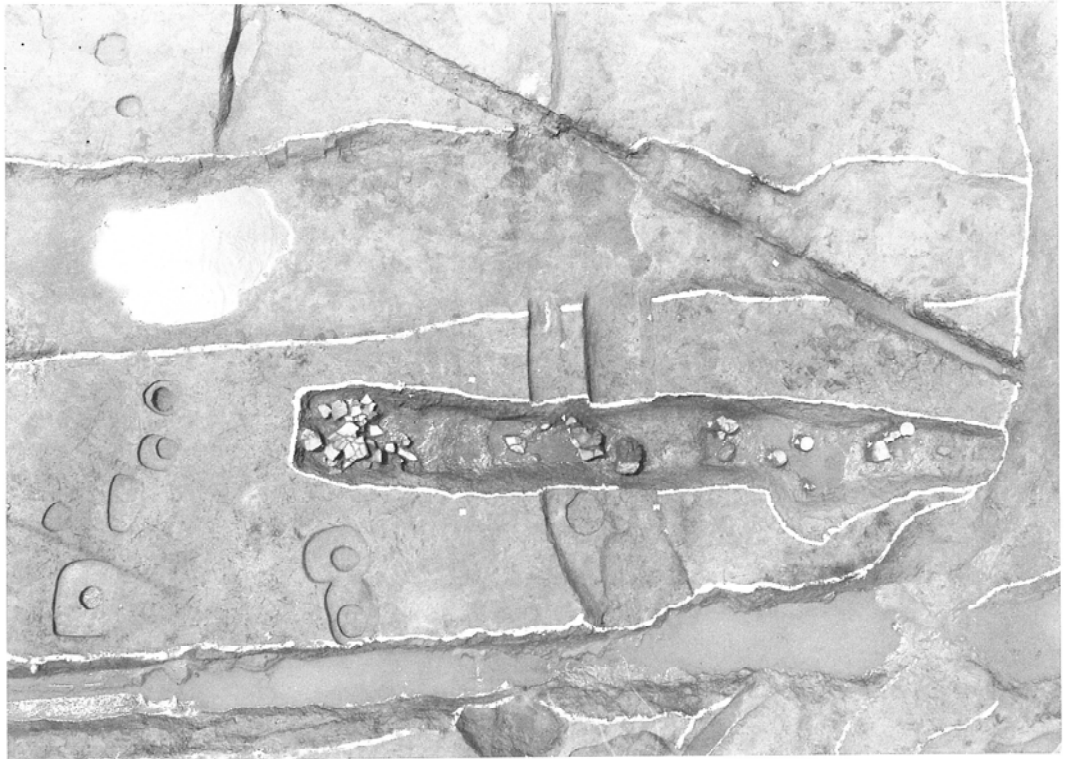
S B 730建物跡 (南西から)



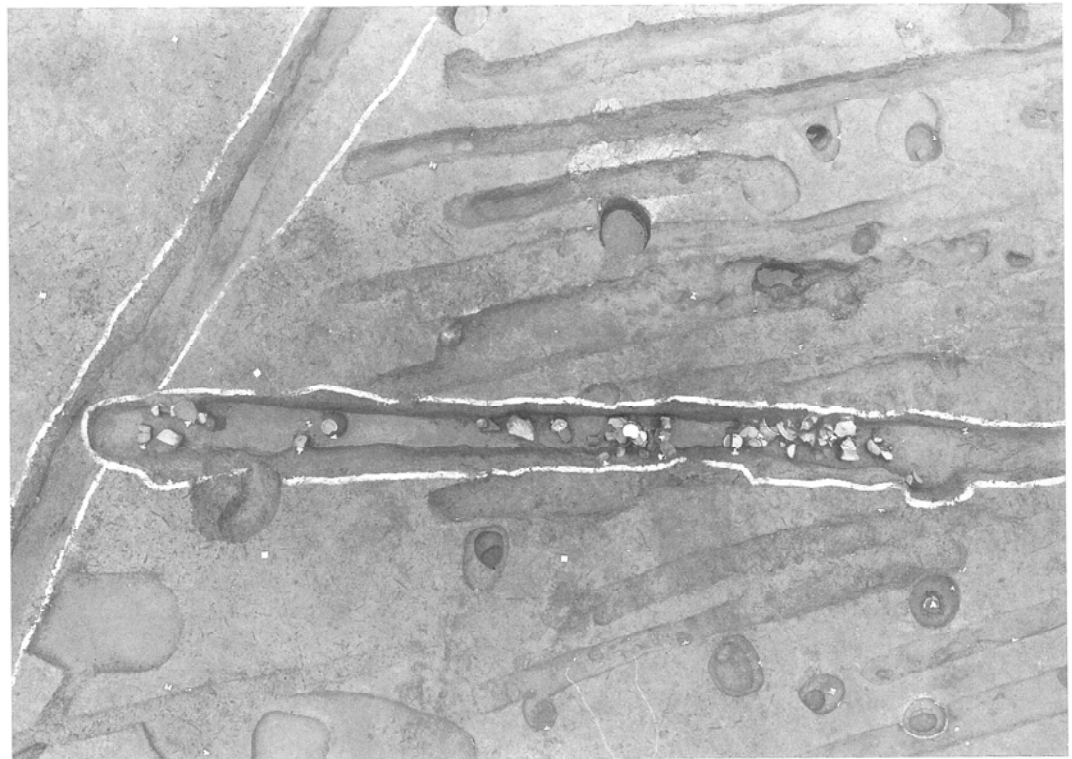
S B 730建物跡 (南から)



S X 192遺構 (南から)



S D 540溝状遺構



S D 400溝状遺構



S D400溝状遺構（南から）



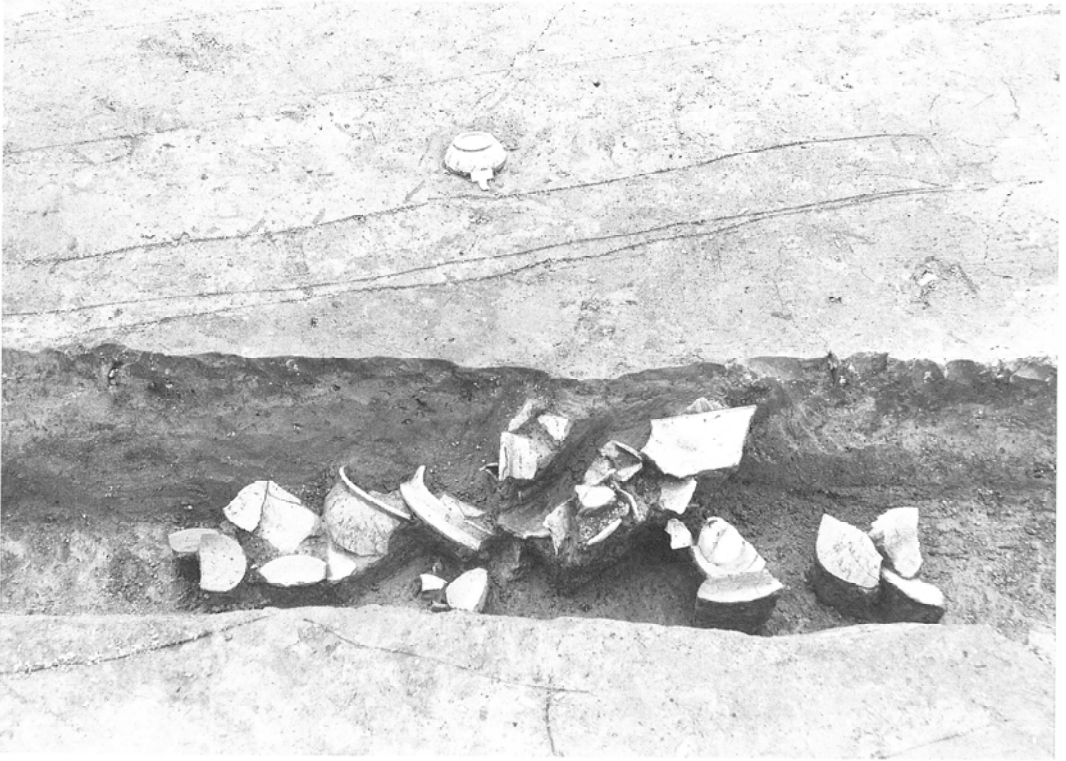
S D400溝状遺構土層（南から）



S D 540溝状遺構 (南から)



S D 540溝状遺構 (南から)



S D400遺物出土状況（西から）



調査説明会風景



B区遠景（南西から）



T14~21近景（東から）



T 5 板材 (西から)



S X 40遺構 (南東から)



T 9・10近景 (南東から)



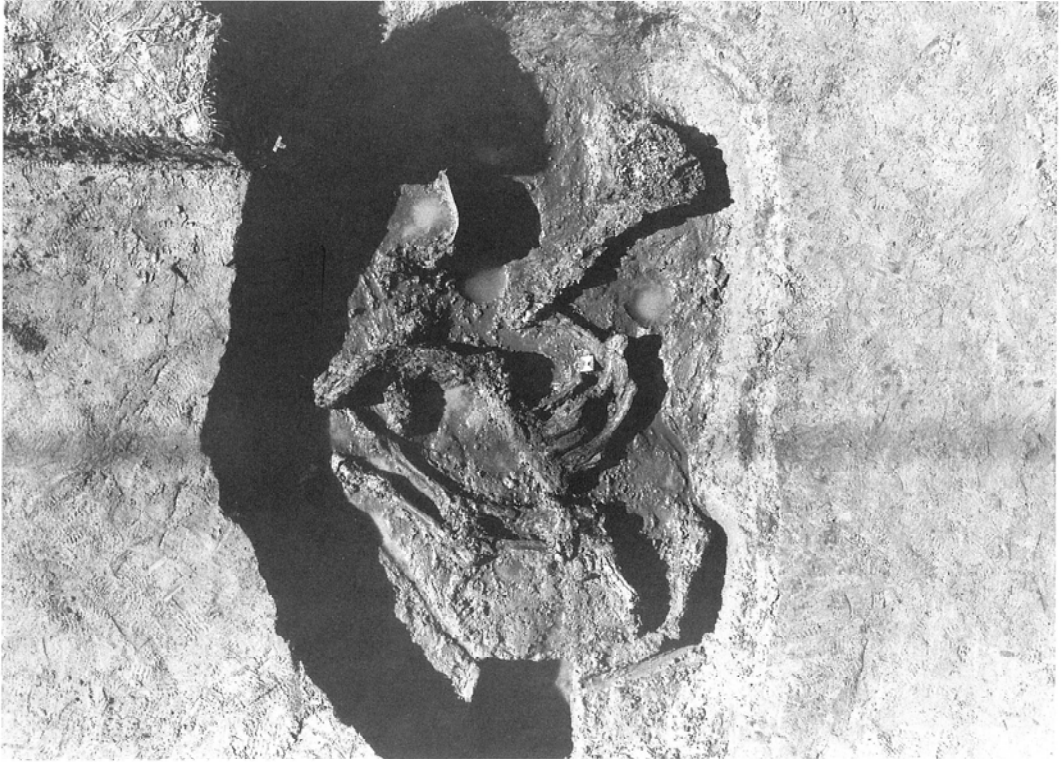
S X 100遺構 (南西から)



S D21溝跡



S D21遺物出土状況（南から）



S M708墓壇



S M708出土曲物残片（西から）



トレンチ掘り状況 (東から)



SG 6 河跡 (西から)



T 33・34近景 (東から)



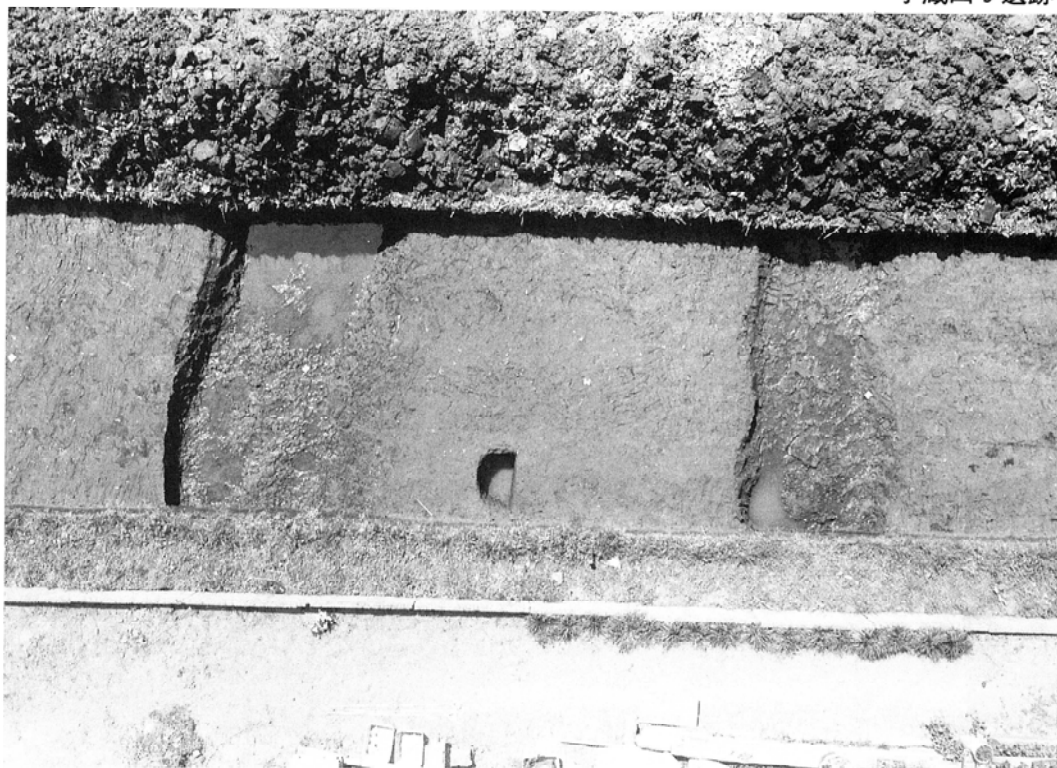
T 25近景 (西から)



調査状況（西から）



SD 2・3 溝跡（北から）



SD2・3溝跡(東から)



SD2土層(西から)



E B 1・2 柱根 (南から)



E B 1・2 柱根掘り下げ状況 (南から)



E B 2 柱根 (東から)



E B 2 柱根底部 (北から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



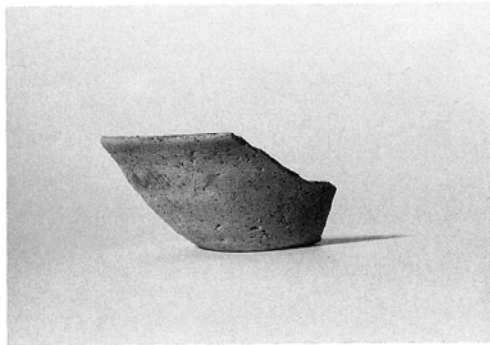
10



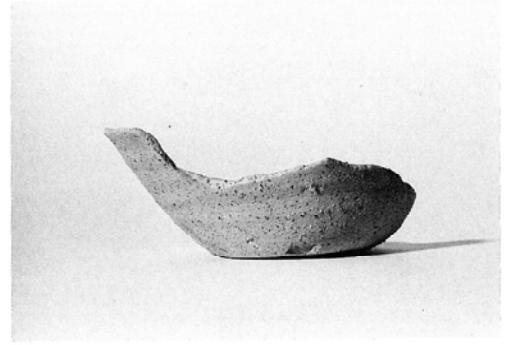
11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



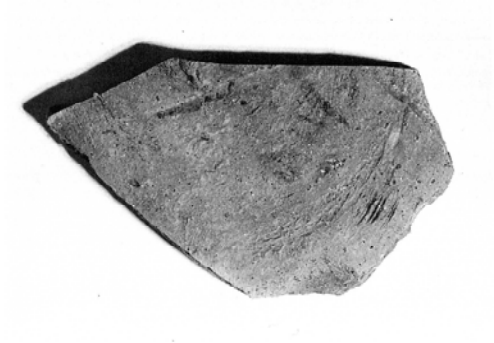
23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



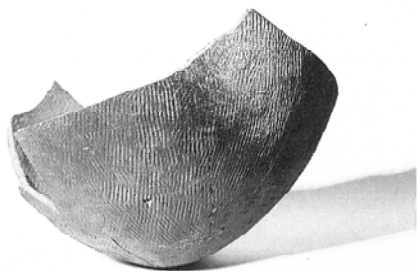
46



47



48



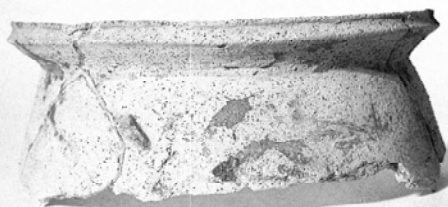
49



50



51



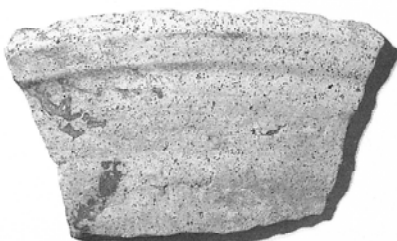
52



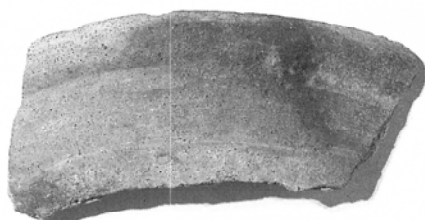
53



54



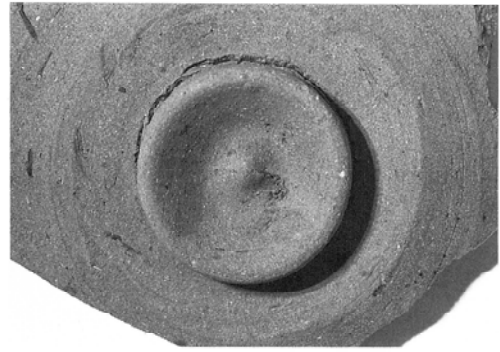
55



56



57



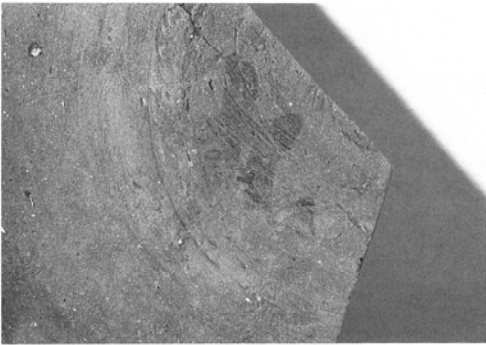
58



59



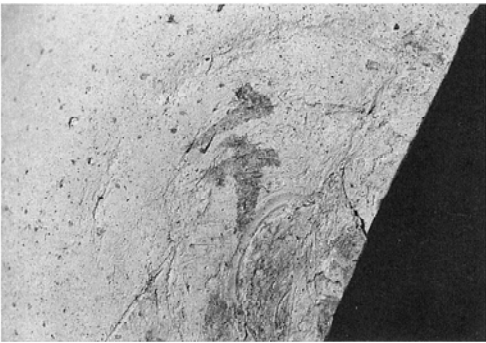
60



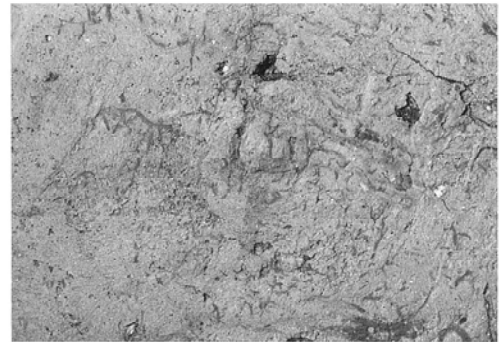
61



62



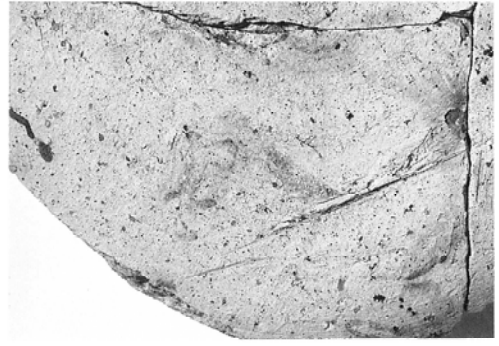
63



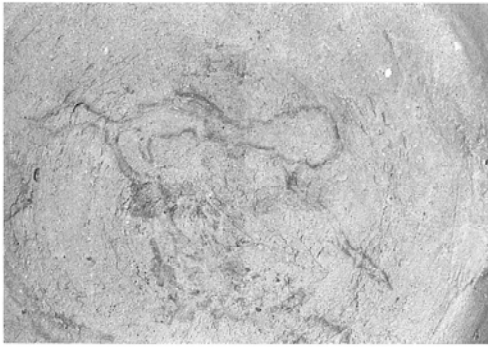
64



65



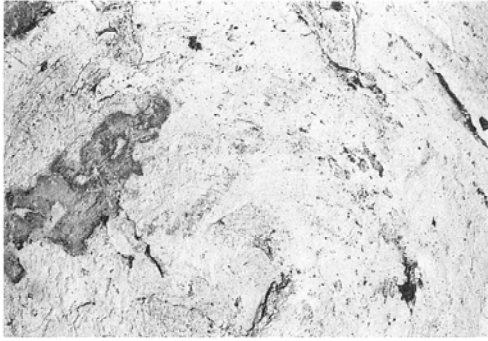
66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



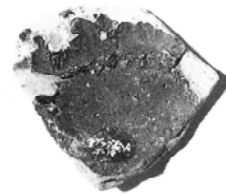
97



98



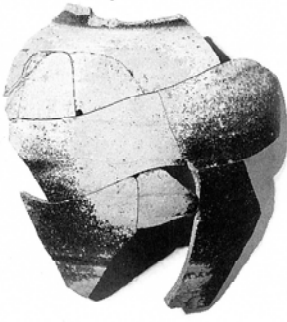
99



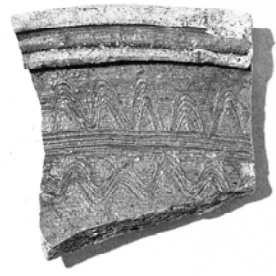
漆附着須恵器



手蔵田5遺跡 土錘・フイゴ羽口・石製円盤



89



90



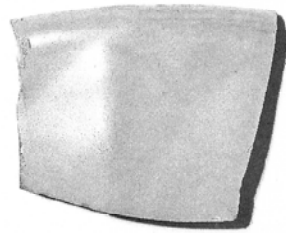
91



92



93



94



95



96

山形県埋蔵文化財調査報告書第138集

中平田東地区遺跡群
手蔵田5・6・9遺跡
本川遺跡
発掘調査報告書

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大場印刷株式会社
